

# Think the Earth Paper

Think the Earth Paper vol.8

Spring-Summer 2011

特別号

## EARTHLING

アースリング＝地球人

アニメーション映画監督・原作者  
**富野由悠季**

プロフリーダイバー  
**篠宮龍三**

映画作家  
**河瀬直美**

写真家  
**石川直樹**

都市・地域計画家  
**芹沢高志**

政策学者  
**西田亮介**

環境経済学者  
**香坂玲**

JAXA宇宙飛行士  
**山崎直子**

GAO代表  
**アロン・ベリンキー**

ソーシャル・プロデューサー  
**水野誠一**

慶應義塾大学大学院教授  
**古川享**

地球を間違いないく使っていく方法論が生まれるのなら、それが人の革新なんだ。

人間の力が有限だとイメージできれば、自然も限界を超えれば死んでしまうと、気づくはずなんです。

7代先のことを考えて物事を興せ。奄美大島では当たり前前の考え方。これからは継続が基本的な指針になる。

パラボラアンテナが立って電気が導入された藁の家があって素晴らしい人もいればしょうもない奴もいるという世界の姿を見なきゃいけないと思う。

物質的な意味での縮小は恐れるに足らない。絶対に避けねばならないのは想像力の縮小なのだが、現実はその逆になっている。

人は「再チャレンジすることができない」と思うと冒険できない。「寛容性」のない社会に「創造的な主体」は生まれえない。

環境保全は常に政治、経済、人権などの問題と表裏一体の関係であり続ける。

宇宙ステーションでの生活を存続させる技術というのは、これからの地球のための技術につながっていくと思います。

意見を持ち寄り、行動を起こすためのプロセスに参加して欲しい

これから環境問題を解くときには急速に進化する文明に対して、文化というもうひとつの軸を明確に持たなくてはならない。

根っこにあるものとして、人間が豊かな生活を送るということの定義が、少し間違ったベクトルに動いていたと思うんです。

本紙に集録されているインタビューは、すべて3月11日の東北地方太平洋沖地震発生前に行われました。被災地の方々にとってはもちろんのこと、この日を経たすべての人にとって、3月11日以前と以後では状況が大きく異なると思いますが、インタビューに応じてくださった方々の言葉が、日常を取り戻そうとするとき、少しでも力になればと編集内容を変えずにそのまま発行することにしました。本紙が私たちのこれからを考える一助になることを願っています。

# EARTHLING

## 多様な可能性をもとめて

「EARTHLING」は平たく言えば「地球人」という意味です。「宇宙人」に対する概念として、「地球に住む者たち」を指して使われるようになった比較的新しい言葉です。SF作家のロバート・A・ハインラインが1949年に「レッド・プラネット」という小説で使い、1997年にはデヴィッド・ボウイが「EARTHLING」をタイトルにしたアルバムを出しています。

この「EARTHLING=地球人」という言葉は、いま私たちが生きている時代を語る共通言語であると同時に、持続可能な社会へと歩みを進める大きなキーワードだと考えました。

50年前、ガガーリンが宇宙に行くまで「地球は青かった」ことを人類は知りませんでした。その日以来私たちは、惑星大の意識を獲得する歴史のなかを生きていると言ってもいいでしょう。この半世紀の間に人類は2倍以上に増え、相変わらず争いを止めず、自然破壊をしながら21世紀を突き進んでいます。地球環境に目を向け、世界との繋がりを視野に入れて行動する人も着実に増えています。

今回の特別号は、Think the Earthプロジェクト主催で行われるトークイベント「EARTHLING 2011」にあわせ、各分野の専門家や表現活動を行っている「EARTHLING=地球人」にインタビューを行いました。いま何が起きているのか、これからの50年は何が大切になっていくのか。多様な可能性をもとめ、綿々と続く人の暮らしや命、意志の強さや挑戦の先に、「EARTHLING=地球人」の未来があると信じて。

## EARTHLING 01

## 富野由悠季

Yoshiyuki Tomino

アニメーション映画監督・原作者

1979年から放映された『機動戦士ガンダム』をはじめガンダムシリーズの生みの親として知られる富野由悠季。人口の増大、地球環境の悪化による宇宙移民といった人類の未来をフィクションの世界で描いてきた富野監督が考える、地球人とは。

聞き手●上田壮一 写真●伊藤慎一

インタビューの冒頭、富野監督は同席した学生たちに向けて、地球環境に対する意識や生活の中での実感など、いくつかの質問をし、対話し、こう締めくくった。

「みなさんの意見はおおむね正しいと思います。僕はこの先50年、今の30代半ば以下の年代がやってくれることを黙って見続け、時間を過ごしていけば、人類は少くらしい地球を長持ちさせるようなシステムをつくっていけるんじゃないかと思っています。だから後はみなさんの世代で何とかしてね、と言うしかないのです。」

そのうえで、「ただ……」と一瞬の間を置き、富野監督は一気に話しはじめた。

**富野** ひとつだけ、今の会話の中で、ものすごく腹が立っている言葉があります。「生活を豊かに」という言葉です。

みんなが生活の豊かさを目指したら、地球は早晩、潰れるんだよ。これからの時代、豊かな生活なんていうのは、あるわけがない。だけど「豊かに」と言わないと選挙の票がとれない。みんながこっちを向いてくれないから「豊かに」と言う。

でも、その言葉遣いこそ、徹底的に嘘。これから80億の人間がみんな自動車に乗って、中国とインド大陸の内陸部までコンビニがあったら地球はこの先100年もたないかもしれない。だけど、今の日本人の頭の中にある豊かさって、それでしょう。100億の人類が地球上で豊かに暮らせる未来なんかあるわけがない。

我々が身につけていかなくちやいけない「ものを考えていくセンス」は、一体どういうところにあるのかを、言葉遣いの問題から考えてい

かなくちやいけないんです。

大手企業なんかが見せる未来ビジョンで困るのは、ハイウェイがあって、高層ビルがあって、その足元と屋上にちよぼちよぼとグリーンがあるイメージでしょ。ぼやぼやしていると、何かよくわからない空中を飛ぶ乗り物が平気でいて、ロボットが立っている。

大体、人型のロボットと生身の人間が共存して暮らせるなんていう別のレベルの話が、いまだに現有勢力の知見として残っているなんてアホなんですよ。

人型のロボットが動くとなったら、人工頭脳もあり得るんじゃないかと言うけれど、それは研究者の目標値でしかない。社会に押し広げるべきものではないんです。

そのような言説は、20世紀型の人々が持っている各論であって、自分の主義だけを通そうとしている「視界の問題」で、これが大きな問題なのだと思う。

各論から入るのは大学で授業をやっている間だけで、教室や研究室から出たら、社会や公共の中の「我」というのは、どういう関係性をもつのか、その「我」が追い求めようとしている技術が、社会や公共に対してどう押し広げられていくかを考えていかなければならない。それがわかる自分をつくっていくためには、もっと遊ばなくちやいけないのかもしれないし、異なるジャンルとのコンタクトをもっと持つていかなければならないんじゃないのか。

## 物事を根本的、根源的に考える。

**富野** 根源的にももの考えるというところを若いうちにやっておかないと、ほんとの意味での21世紀に向けてのハウツーは手に入らないんじゃないのか、と思ひ始めています。

物事を根本的に考えていったときに、「EARTHLING」のようなテーマについても、僕はまず、政治家と経済が変わらない限りだめだと思っています。市民運動をやっているレベルでは、絶対に突破できないことなんですよ。

エネルギーの問題をきちんと押さえなければいけないと言いながら、我々は根本的にまだエネルギーの問題を解決する方法を持ってないんですよ？

僕、本当に分からないんだけど、原発ひとつにしても、ウランはまだ2、300年とれるみたいな言い方を原子力関係の専門家はして、それを使い切ったらどうするという話は、一切ない。現在使われている原発より効率のいい原発もあるということを、2年ぐらい前に教えてもらいました。そのような形の原発を使えば、現在使われている原発より放射性廃棄物が少なくなることも聞きました。ところが、放射性廃棄物というものが皆無にならなければ安全にはならないわけけれども、その部分については口を閉ざすことになる。

放射性廃棄物の処理については、現在地中2、300mに埋めて廃棄するという言い方をしているわけだけど、僕はそれで済むのかと思っています。そこで、大陸プレートの地殻が沈み込んでいるところの境目に放射性廃棄物を投棄し、100年たてば10mぐらい、300年たてばもっと深いところに潜り込む。地上から2、300mの

穴を掘って、コンクリートを打ち込んで埋めるよりは、确实だと考えました。が、大陸棚プレートが沈み込んでいるところは日本海溝なんで、そこには投棄できません、と指摘されたことがあります。理由は放射性廃棄物は海に捨ててはならないという法律があるからです。

ではエネルギーは、500年後には全部太陽電池パネルに切りかえなくちやいけない、という話だけど、太陽光パネルに関しても日本には大問題があって、サハラ砂漠もタカラカン砂漠もないし、オーストラリアの真ん中にあるような高地もないから、太平洋上に太陽光パネルを張るぐらいしか方法がない。あるいは山の南向きの斜面に太陽光パネルを張るぐらいのことで500年後の電力が賄えるのか、という話に関しては、おそらく通産省も試算を出してないんじゃないかと思う。試算を出していれば、「宇宙エレベーターのプロジェクトの研究をしましょう、2030年までに」みたいな、プランが出てくるわけがないでしょ？

## リアリズムとフィクションの境界線。

——宇宙エレベーターについては、その可能性を富野監督も調べていて、ガンダムの中にも描いています。そこには、リアリズムとはまた別の視点、フィクションというものの役割について、感じていることがあるのでしょうか。

**富野** あんまり感じてはいませんけど、あんまりということば、少しは感じているんですよ。

一番の理由は、ファーストガンダムから30年経った今でもタイトルが死んでないこと、ガンダムから延長された物語が作動していること。その意味は、巨大ロボットものというアニメの中でも最下等のジャンルのものでも、一番根本的なコアな部分を封じ込めておいたおかげだからです。この実感があって、宇宙エレベーターを調べる気になったんです。

僕は宇宙エレベーターは信じていないほうなんです。そうは思っていない、宇宙エレベーターをつくるぞ、と思うことは、とても正しいことだとも思っているのです。宇宙エレベーターを考えるようになって、リアリズムとフィクションの境界線がわかってきたんです。

つまり、夢とロマンというのは何なのかと分かるようになった。夢とロマンというのはフィクションみたいなものです。現れもしない王子様、ありもしないお姫様、ありもしない宇宙エレベーターなんです。

## 夢とロマンというイメージに向かって。

このありもしない白馬に乗った王子様とか、お姫様を目標にするということば、ひょっとしたら人類は1万年前からやっていたのではないかと考えるようになったら、宇宙エレベーターもフィクションの中では「あり」。理念としても「あり」であって、目標設定としてあっていい。その上で、リアリズムで考えていくということが大切なことだと分かった。

宇宙エレベーターという目標設定をしたときに、足場を研究する人が100人、500人、1万人と集まると、リアルに一歩前に進もうとする



才能が出てくるわけです。現にカーボンナノチューブという物質を使って、もうここまで来たか、ということがある。そうなれば、結っちゃって糸にしよ、糸にしたのを1キロまで伸ばせ、ということが言えるわけです。1キロ伸びたぐらいで宇宙エレベーターなんかできるわけないけど、カーボンナノチューブの1キロの糸ができたときに何が起るか、ということはまだわからない。そのことが未来にどういう可能性をもたらすのかは、わからないんです。軽さとか強度とか材質の性能が今までのものと根本的に違うので、あらゆるものに応用が利くらしいんですね。だから宇宙エレベーターのケーブルにするぞと思いついて、やれ！ 行ってみろ！ という。ここに、白馬の王子様がいます。

こういう夢とロマンがなければ、まだ用途不明の研究開発など誰がやり、ということなんです。

我々は、夢とロマンなんていうボヤーっとしたものがあから、今こうやって生きてられるわけでしょう。若い学生たちは、将来いい人と結婚できると思っている。そう思えなかったら、この青春、むなしもんね(笑)。

おそらく人って、当たり前すぎるからあまり自覚していないんだけど、夢とロマンがなかったら、暮らすということはかなり過酷ですし、何よりも寂しいですよ。

人は情動があるから生きていける、暮らしていけるのです。殺したものを食べてでも生きて

とすれば、千年の右肩上がりなんて、あるわけがないでしょう？ 生活の我慢を覚えて、「でもまあ、これが世の中よね」というふうに常識を切りかえるのに、50年、100年じゃ済まないでしょう。

そして、もう一つ重要なことなのは、これは観念だけの問題ではだめで、やってみせなくちゃいけない問題なんです。「日本国民は経済成長なしにずっとやってきたけど悪くはないですよ」というふうに、実践をしていかない限り、常識というのは根づかないんですよ。それを企業体としても実践し、うん、これでいいんだよね、というのが少なくとも日本に関して、1億人全員に身につくのに、僕は最低200年かかると思っています。

人の革新っていても、その程度のことなんだよ。超能力者になるとかじゃないんですよ。その程度のことを200年かけてやって、千年も万年も地球を使っていく、日本列島を使っていく方法論を確立していかなければならない。それができたときに、人は革新したといえる。

### 距離はまだ遠い けどやらなくちゃならない。

産業廃棄物とかごみ問題というものに直面し、リサイクルを徹底的にやらなくちゃいけない、というときに、今までの考え方や常識にとらわ

## 地球を間違いなく使っていく 方法論が生まれるのなら、 それが人の革新なんだ。

いくというのは、単に欲望論ではなく、自分が生きていく限り何かを思う、という夢とロマンを秘めているんです。数億年前の太古の時代も、数百年前の中世の時代もそれは同じですよ。生きるという命の、つまり生の衝動というのは、人が生まれ、ある自覚ができたときから、絶えずそのイメージに向かっていくことなので、現代では、宇宙エレベーターのようなものが象徴として立ち上がっているのだと思います。

### 人の革新は この先200年はない。

——地球人、アースリングという言葉自体、まさに、夢とロマンかもしれません。そういう言葉があるから、目標となって向かっていける。そうはいっても、一体いつになれば、その目標に近づけるのかと考えたとき、以前富野さんは「今後200年、人の革新はあり得ない」とおっしゃった。なぜですか？

富野 それは、ものすごく簡単なことです。だって、経済の右肩上がりの成長というのを全否定しなければならない、というのが基本にあるからです。不景気だと気持ちが悪いわで、景気がいいと、世の中何となく明るくなるし、日本はいい国よね、という気分になっちゃう。ということ考えたときに、ほんとに困ることなんだけれども、これから千年地球をもたせよう

れていたら、絶対にやれない。けど、やらなくちゃいけないといったときに、環境ジャーナリストの枝廣淳子さんは、ニュータイプ(ガンダムシリーズに登場する概念)という言葉を使ったんです。「環境問題を乗り越え、地球を永く使える人になったときに、人はニュータイプになる」、と。僕は、ガンダムでニュータイプの概念を規定できなかったけど、枝廣さんの言葉が、ニュータイプのリアルな規定付けだと思いました。

小さな企業を含め、今行われているリサイクルへの取り組みや仕組みを見ていると、間違いなく何かができるかもしれないし、人間は捨てたもんじゃないと思っています。緻密さをはじめ日本の技術者が持っているものを集大成していけば、ひょっとしたら「資源の完全な再利用」はあり得るんじゃないか。それができる人がニュータイプであり、その過程に立ち合っているという意味では、とてもエキサイティングな時代に入っているんだ、というのが枝廣さんの論調です。

資源を再利用できるというだけでも、かなり過酷に観念を変えていく必要があります。ごみの分別ひとつにしても、3種類分別じゃだめで、6種類、12種類分別ができるぐらいの知恵を持たないと、再利用ってできないんでしょ？ プラスチックはすべて同じではないし、乾電池みたいなものをどう振り分けるかと考えれば、ま



だ我々はその能力すら持っていないと思います。各家庭が乾電池をばらして、きちんと分別できて、廃棄できるみたいなシステムまで社会に定着させなくちゃいけない。

そういうことは、経済基盤がなければできないわけだから、経済の右肩上がりはいけない、いけないと言いつつ、我々は経済社会を維持しなければならない。賃金をもらって、生活費も獲得しなければならぬ。矛盾する命題を解決しながら、完全に循環するシステムを構築しなくちゃいけないんです。

### 経済活動 ニュータイプ論。

現在、「経済活動」といったときに、我々は金融経済という構造を想起してしまうでしょう。リーマンショック以後といたしながら、経済のスペシャリストは実業をみるのではなく、俗に言う「富を寡占している」状況を生み出しているわけです。余った金を国家の赤字を補てんするところに還流できない、といったことは、20世紀までの人の持っている怠惰な部分とか、資本主義の問題といったものがある。だから、ニュータイプというのなら、単純に資源とか、環境問題のことを考えているだけではなく、そういった部分もきちんと押さえていくだけのセンスを持たなくちゃいけないわけです。

この話を経済人にしても、聞いてくれないのは、目の前の投資の問題だけで頭がいっぱいだからでしょ？ でもその投資が見ている未来というのは、しょせん10年、長くても30年先くらいです。

僕が言っている未来ってというのは、100年、1000年、10万年の単位だから、彼らの一時金のことは考えられないのです。だからと言って、余剰金を全部こっちにもらうよ、と言えるだけの強権発動もしていかなくちゃいけないのだけれど、強権発動という言葉の怖さを知ったうえで、それを正確に発動できる「我」というのがあるか、という大問題に突き当たります。ニュータイプ論は、そこまです。

富野由悠季

1941年生まれ。小田原市出身。日本大学芸術学部映画学科卒業後、虫プロダクションに入社、TVアニメ『鉄腕アトム』などの演出を経てフリーに。日本の様々なアニメーション作品の絵コンテ、演出を手がける。主な監督作品に『海のトリトン』『機動戦士ガンダム』『伝説巨神イデオン』『リーンの翼』などがある。また、作詞家、小説家、大学教授も務める。2009年ロカルノ映画祭にて名誉賞受賞。

——フリーダイビングにとって、何より「調和」が大事だと篠宮さんは口にされています。それは、具体的にどんな事象を指すのでしょうか？

**篠宮** 仲間との関係、自分の心と身体の統一、海との一体感……さまざまな要素において、バランスが取れている状態ですね。例えば、フリーダイバーにとって記録を競い合うライバルは、互いにサポートしあう仲間のような存在でもあるんです。日本の漁師のように、例えどんなに大漁でも、仲間からのSOSが聞こえたら、すぐに助けに行く。それができない個人主義の人間がフリーダイビングをしても、必ず痛い目に遭います。海が一番深いところで耳の鼓膜を破ってしまったり、「ブラックアウト」と呼ばれる意識が途切れて身体が動かない状態になってしまったり。

鼓膜を破るほど我慢をしてしまうということは、自分の心と身体の調和がまったく取れていないということなんです。自分の身体にはもう鼓膜に送り込むだけの空気が無い、って分かっているながら突き進んでいるんです。もう愚の骨頂なわけです。

極限の状態で「調和」を重視し、勝負を捨てて帰って来られるか、それとも固執して痛い目に遭うか。仲間との関係や海との一体感を構築できていなければ、判断を誤るんです。フリーダイビングは西洋で生まれたスポーツですが、「調和」が重要だという意味では、すごく東洋的な考え方が必要とされるものだと思います。

## 潜りながら死へと向かい、 帰りながら生へと戻る。

——フリーダイビングの最中に体内の空気残量、あるいは身体の微細な変化を感じることができるとは？

**篠宮** 陸上では変化が緩やかなので分からないと思いますが、水中では身体のセンサーが立ってくるんです。深く潜っていくと、血液が生命維持のために脳と心臓に集中する「ブラッドシフト」という動きがありますが、それもはっきりと分かります。脳に血液が集まって、手足はサーッと血の気が引いてくる感覚ですね。痺れたり、鈍くなったり、冷たくなったり。フリーダイビングは、潜っていくときには死を感じて、帰ってくるときには生を感じるスポーツだと言われる理由もここにあります。

ずっと息を止め続けていられる人間はいないわけですから、息を止めている時間が長くなればなるほど、身体が死へと向かっていくわけです。息を止めているとどうなるかというと、限られた酸素を有効に使おうとして身体は心拍数を下げていく。心拍数100だったものを半分減らせば、潜っている時間は2倍に延びるわけです。そういうふうには身体の機能をどんどん低下させて、緊急事態に対応していく。

この緊急事態を冷静に受け止めなければいけない。それは生と死の間がグレーゾーンのような、生死がひとつのものとして存在するような感覚です。まだ生きているんだけど、このまま行ったら死ぬよなっていうか(笑)

じゃあ、何を判断の基準として生へと帰ってくるかというと、それはもう直感しかないんです。第六感と言ってもいいのかもしれない。論理的な思考ができるような状態ではないですし、自分の生物としての本能に任せて帰ってくる。その感覚を無視して、もし仮に成功したとしても、力業で帰ってくる時はとても怖いんです。まさに命からがらという状態。だから、例え成功しても全然うれしくないんです。

## 海中での身体の変化で、 自然が抱える苦しさを知る。

素潜りはとても特殊な状況で、海の中では身体が閉じた状態になるんです。限られた資源である酸素を肺の中に溜め込んで、海中へと持っていく。大事にその資源を使いながら、パフォーマンスをいかに長く、安全に行って、帰って来られるかというのがポイントなんです。そのときに重要なことが2つあって、ひとつは無駄な動きをしないこと、もうひとつは無駄な思考をしないこと。脳が一番酸素を使うんですね。だから効率よく動き、頭も必要以上に使わない。

これは、地球環境との付き合い方に非常に似ているなと思っています。地球上には限られた資源しか無いわけで、上手く使っていけないと、どこかで糸が途切れてしまう。生きて帰るためにしてはならない「無駄な動きや無駄な思考」というものが、地球環境においては、どんなことに当てはまるのか、それを考えていかなければならないのかもしれない。

——人間が、地球の相似形であると自らを通して感じることで、地球そのものの問題も、自分

自身のこととして認識することができる？

**篠宮** そうです。人間は身体から酸素が失われるとブラックアウトして、誰も助けてくれなければ死んでしまう。それなのに酸素の低下レベルは人間のセンサーでは感知できず、二酸化炭素があるレベルに到達すると、苦しいと感じ始めるんです。つまり、酸素がどれだけ減っても、二酸化炭素が増えなかったら苦しいと感じられない身体の構造になっているんです。

二酸化炭素が増えてくることで苦しさを感知するって、地球上で起きていることと同じだなと思うんです。海の底で感じる苦しさは、自分の身体を通じて、地球が抱えている苦しさと同じなんじゃないかと感じています。

もちろん誰もが僕のように命がけで海に潜る必要はなくて、例えば1時間走るだけでも、結構苦しかったり、足が痛くなったりするじゃないですか。人間も自然の一部ですから、その痛みは自然の痛みと同じことだと思うんです。

## 精密機械のような性能と 有限であるという事実。

ブラックアウトという現象って、非常によくできていて、実は人間の防御反応なんです。

持っている酸素量が100だとして、100全部を使い切ってしまうと死んでしまいますよね。なので、100になる前、90くらい使ったところで意識をパツンと切るんです。すると身体の状態がだらんとして、一切筋肉が酸素を使わなくなる。その状態で気道が確保されれば、つまり周囲が安全な状態になれば、およそ30秒で自動的に呼吸を再開するようになっています。人工呼吸も必要なし。気道を空けておけば、自然と復活するんです。復活するだけの酸素を残して、その手前でリミッターを切る。まるで精密機械のようですね。

そのことに驚くと同時に、人間の力は、やはり有限なのだと強く感じます。無理をすれば死んでしまう。フリーダイビングだけでなく、陸上で行われる普通のスポーツであったとしても、限界以上のことはできないわけです。

もしかしたら、今の社会もブラックアウトのように生きるか死ぬかのところまで行かないとわからないものがあるかもしれない。でも、人間の力が有限であるとイメージできさえすれば、同じように自然も限界を超えれば死んでしまう

と、気づくはずなんです。

自分の身体を使って何かをする、ということはとても基本的で、かつ大事なことに気づかせてくれると思っています。僕は素潜りのスクールもやっているのですが、生徒さんは身体感覚に目覚めて帰る方が多いですね。今まで感じたことの無い世界なので、自分の身体が明確に変化することが分かりやすいのかもしれない。それから、自分の心と向き合うという体験も日常ではなかなかないので、心地よかったり、すっきりするみたいです。

——篠宮さんは、ジャック・マイヨールに憧れて海に潜り始めたと著書などにも書かれています。そのジャック・マイヨールはかつて、イルカ人間と称されました。違う種であるイルカに近づきたいと、篠宮さんも思いますか？

**篠宮** どうでしょう。近づくことさえできない存在だと思っているかもしれません。僕は、海に潜っている最中にクジラに出会って、本当の偉大さに気づきました。クジラは彼らの大きな脳みそを仲間同士のコミュニケーションだったり、情報の共有だったり、内側に対して使っていると言われてます。外側に対して、例えば環境に対してインパクトを与えることはほとんどない。遠く離れた存在と情報を共有するという、インターネットの発達によってここ数年で可能になったことを、イルカやクジラは何百年も前から、音を使って行っていたわけですね。しかも平面的な情報ではなく、立体的な情報を道具も使わず、世界中どこにいても共有することができる。

巨大な力を持つ存在であるにもかかわらず、人間に危害を加えることもない。例えばフェリーの航路にクジラが泳いでいたら、人間は危ないとか邪魔だとか思ってしまうのに、クジラたちは悠々と泳いでいるんです。ちょっと身体をぶつければ、人間の船なんて沈没させることもできるのに、これだけ人間が彼らの領域を侵犯しているのに、彼らはまったくやり返さない。それは、最高の強さですね。

## ブルー以外は何も存在しない 純粋な魂だけになれる場所。

——100mを超える深い海に素潜りで行ったことのある人間は、人類史上わずか13人です。そこはどんなところで、どんなことを感じるの

ですか？

**篠宮** 光もないし、音もないし、重力もほとんどない。海というよりも、宇宙に近いのかもしれない。すべてがブルー。上下左右の感覚もなく、ブルー以外は何も存在しない世界。ここでは、純粋に自分の魂になれる気がするんです。何かがあるというよりも、自分の内側にすぐ入っていくというか。シンプルになりますね。

なぜ僕が海に潜るかといえば、やはり、全体の調和を完成させたいから、かもしれません。潜っていくときには途中でキックを止め、酸素を温存して落ちていくだけになるんですが、帰ってくるときは酸素を使うのもっとも苦しいんです。だから一番下に着いたときにも慌てずに、ハイペースになりすぎないようにして、調和を保ったまま帰って来られるか。行って帰ってきて、初めて完成ですから。

自分ができる！ と信じているのも結構疲れるんです。なので、どちらかというゆだねる。自分自身を海にゆだねて、生命を一時的に預けるくらいの感覚です。

宇宙旅行はきっと将来、お金を出せばできるようになると思います。でも、身体ひとつで水深100mの世界に潜り、帰ってくるということは、調和がない限り、どんなにお金を出してもできることはありません。道具がほとんどいらないということも、ひとつのポイントかもしれませんね。使う道具が少なければ少ないほど、感覚的に鋭くなる。両足をそろえてフィンを履いた瞬間にスイッチが入って、フリーダイバーという生き物になるような気がします。それは、まるで今まで地球上に存在しなかった、新しい生き物になるような気分です。

## EARTHLING 02

# 篠宮龍三

Ryuzo Shinomiya

プロフリーダイバー

ただ海に潜るだけのシンプルなスポーツが讀える、海の叡智と人間の可能性。水深115mの光も音も、重力もない世界。「調和」を保つことでしか成し得ない奥深き競技から、プロフリーダイバー、篠宮龍三は何を得たのか？

取材・文●村岡俊也 写真●伊藤徹也

篠宮龍三

1976年生まれ。2008年バハマにて、アジア人初となる水深100mを達成。2009年には、憧れの存在であったジャック・マイヨールの記録を上回る107mに到達。2010年に水深115mのアジア記録をマークする。国際大会を中心に参戦する傍ら、素潜りの魅力を伝えるべく、少人数制のスクールを伊豆、沖縄などで運営。著書に「ブルー・ゾーン」(牧野出版)がある。

<http://www.apneaworks.com/>

人間の力が有限だとイメージできれば、自然も限界を超えれば死んでしまうと、気づくはずなんです。

# EARTHLING 03

## 河瀬直美

Naomi Kawase

映画作家

生後すぐに生き別れた父を探すドキュメンタリーでデビューし、家族や生命をテーマにした作品を数多く生み出してきた河瀬直美。映画作家として、娘として、母として、その眼差しは常に、人間という動物を見つめ続けている。生命も、社会も、「否定ではなく、肯定することで始まることは沢山ある」と語る彼女は、いま、地球人の未来に希望を感じている。

取材・文●村岡俊也 写真●平野太呂

7代先のことを考えて物事を興せ。  
奄美大島では当たり前考え方。  
これからは継続が基本的な指針になる。

—昨年公開されたドキュメンタリー『玄牝』では、自然分娩の出産の現場に立ち会い、お産という根源的な営みを見つめています。ご自身の出産を経て、映画制作に対しても意識が変わってきたのでしょうか？

河瀬 そうですね。自分が生まれて、死ぬまでの間にできること、みたいなことも考えるようになりました。自分のことばかりを考えていると、いつまでも長生きをしてお金持ちになれればいいと思ってしまいそうですけど(笑)、命は遥か昔から連綿と繋がっていて、次へと繋いでいくものだと考えれば、自ずから普段の行動も変わってくるし、大事にしなければならないことも変わってくる。私にとって命を授かったことは、そういう当たり前のことにきちんと立ち返るきっかけになったと思うんです。

私のルーツは奄美大島にあるのですが、奄美の人たちの暮らしや考え方の中で私が特に大事にしているのは「7代先の人のことを考えて物事を興せ」ということなんです。それは、まるでことわざのように繰り返し口にされる言葉。7代というと150年から200年ですね。そのくらい先のことを考えながら、今、すべきことをせよ、と。

日本人は、かつてはみんなそうだったはずなんです。例えば、庭に柿の木を植えるときも、自分が食べたいから植えるのではなく、孫くらい先の世代に食べてほしいから植える。そういった農村の生活の継承が、いつ頃からか断たれてしまった。都会での「現在」のための便利なシステムには、その未来を見据えた生活の継承がないですね。

私は奈良に住んでいるので、東京で編集作業をするときには、ウィークリーマンションを借

りています。そのマンションは「ウィークリー」の名の通り、1週間だけ滞在するための建物です。となると、住んでいる人たちは、その土地に対する愛着がなかなか持てない。けれどもし、その土地に1300年続く祭りがあるって、その祭りを仮住まいとはいえ、生活の中で体験することができれば、人はその場所がすごく大事な場所なんだって気づくんです。

ずっと昔から続いてきたものの先に今があって、未来へと継承されていく、その間に自分がいるという意識ってやっぱり大事です。祭りのようにずっと続いてきたものは必ず続けた方がいいと思うし、新しく物事を興すときにも、継続、継承が基本的な指針だと思います。

**地球人は成熟することを試されている。**

—『玄牝』を撮り終えて思うこととして、河瀬さんは「今は私たちがよりよい方向に向かうための過渡期なのかな」と語っていらっしゃいます。そこにはどんな思いがあるのでしょうか。

河瀬 これから必要とされるのは、科学と古代からの営みの融合だと思うんです。この50年で生活は大きく変わりました。特に戦後日本は急速にアメリカナイズされ、極端に変わったし、この10年間だけでも、インターネットを中心に生活は大きく変わった。その変化をフル活用して富を得ている人もいれば、支持している人たちがいる。けれど、目に見えないもの、具体的ではないもの、つまり「人の気持ち」とかですけれど、そういうものもとても大事で、どちらかに偏るのではなく、一緒に考えることができるんじゃないかな、と思うんです。

大事なはそのバランスの取り方で、うまくバランスを取っていくためには、成熟するしかない。地球人は、今、人として成熟できるのかを試されているように感じています。

—都会で生活をしていると、便利さに更に偏重していくように感じてしまうのですが、バランスはとれると、成熟できると思いますか？

河瀬 できる。人にはまだ希望がある、と思いますね。私は奈良のことしかあまり知らないんですが、田舎に行くとかね、まだまだみんな土を

触って生きています。奄美に行っても、移住して自分の家を建てて生活を始めている若い世代もたくさんいる。自分の場所ではできなかったことを、別の場所で表現し始めている。人間って嫌な部分ばかり見ていると自分も嫌になってくるけれど、希望のある人たちと触れ合っていると、希望でいっぱいになる。そういう連鎖はもう始まっていると思います。

最近奈良で話しているのは、「もうネットも繋がるし、BSも入るし、道もできてきた。そのうえ、こっちは畑もあるし、景色もいいから、みんな戻ってくるんじゃないか?」みたいな話ですよ。生きていくのには精神力みたいなものが必要じゃないですか。それが人にとって本当に大事なことでないですか。もしも都会で、精神が触まれて元気がなくなって、田舎に行くとか元気に笑えるのなら、そっちの方がいいんじゃないかとみんな気づいていると思うんです。

奈良の場合は、空とか山とか、大きなものが神様で、そういう大きなものと繋がって守られているんです。都会には「便利」はあっても、「大きな繋がり」がないですね。でも、あともう





一歩ですよ。少し時間がかかるかもしれないけれど、意識の変化の連鎖は、これからどんどん大きくなっていくと思います。

### そこに命が存在している限り、肯定するべきだと思う。

——新しい一歩を踏み出すときの基盤が、河瀬さんが見つめ続けている、家族なのかもしれませんね。

**河瀬** そうですね。やっぱり、家族が最小単位。

先日、奈良で自殺防止対策のフォーラムに参加したとき、ひとりの男性が手を挙げて、自分は鬱だと語ってくれたんですね。会社にも行けなくて、ぶらぶらしている。そんな自分のことを息子はどう思っているのか、ビクビクしながら聞いてみたら、「お父さんはいつも笑っている」と答えたんだそうです。その言葉で、生きていけると思った、と。奥さんも「あなたはあなたのままでいいよ」と認めてくれたんだそうです。ひとりでもいいから自分の存在を、どんな状態であったとしても認めてくれることの大切

さって本当に大きいと思います。

今の社会では、誰かと比べたり比べられたりすることが多いですよ。否定ばかりですよ。でも、『玄牝』でお産の瞬間を見てもらった方には、命の誕生の瞬間に立ち返れば、比べる必要がないことを理解してもらえたと思いますし、今、私は6歳の子の母親ですけど、自分の子に対して、素直に「生まれてくれてありがとう」と思うんです。先に生まれた私たちは、その命を認めるべきだし、肯定から始まることはたくさんある。存在を肯定されれば、その人は勝手に前を向いていくんですよ。

死についても、同じような感覚があるかもしれない。奄美には病院に霊安室がないんですね。つまり、末期の状態になると、みんな家に帰るんです。そして「おばあちゃんが亡くなっちゃうよ」とみんなに伝えると、島の人が集まってくる、島唄を歌ったりする。すると死に向かっている人は、最期に「ありがとう」と安らかに言うんです。ここで生きてきてよかったと。生まれるときと一緒になんです、みんなに見守られて。そういう在り方って、すごいですよね。

### 守りたいと思う相手の範囲が少しずつ広がっている感覚。

——河瀬さんは自身の生き立ちをひとつのテーマとして表現活動を行い、自分自身を撮ることで、先頭に立ってさまざまな思いを伝え続けています。『玄牝』の次回作を現在編集中で、既に新たな撮影も始めているとか。「伝える」という役割を担う上で、その強いモチベーションはどこから来るものなのでしょう？

**河瀬** 家族を持つ人は、せめて家族だけでも守りたいと思うでしょ？ 例えば一緒に仕事をしている人たちも、私の中では家族なんです。大切だとか守りたいとか思う相手の範囲が、少しずつ広がっている感覚があるんです。

そう考えるようになったきっかけは、2009年のカンヌ国際映画祭で「黄金の馬車賞」をいただいたこと。「黄金の馬車賞」はこれまでカンヌ国際映画祭に貢献した監督に贈られる功労賞なのですが、アジアで、しかも女性で初めてだったんですね。今まで自分の居場所を奈良や日本という単位で見えていたのが、そのとき、ア

ジアということ意識するようになったんです。

ヨーロッパから見ると日本は東の端。やっぱり別世界なんですね。その別世界に住んでいることを改めて考えたことで、アジアを意識し、さらに地球全体を意識し…… という風に広がって見えてきた。私はシャーマンの役割を持っていると言われたことがあるんですが(笑)、河瀬直美という私個人の視線や行動ではなくて、何かに突き動かされているような目と身体みたいな感覚もありますね。

もうひとつの大きなきっかけも2009年。息子と二人で皆既日食を見に、携帯もパソコンも一切持たず、奄美大島まで船で渡ったんです。何の情報も入ってこないで、そのとき出会う人たちだけが自分の真実だったんですね。私のおばあちゃんが生まれた村の人たちと日食を体験して、涙が溢れて止まらなくて、私が何かの一部であるということ強く感じました。地球と太陽と月の交わりの中に、私が存在させてもらっているんだと思うと、何かの欠片であると同時に全体でもあるとも感じて。これもあまり言うとも、不思議ちゃんみたいですけど(笑)。そんな体験をして、24時間船に揺られて大阪港に戻ってきたとき、「ああ、私はここに帰ってきたんだ。だから、ここからちゃんと始めなくちゃいけない」という、生まれ変わったような感覚があった。感じたことを形にしていかなければいけないって改めて強く思ったんです。

### 待つという行為の中で育まれる宇宙というスケール感。

今、万葉集をテーマにした映画を撮っているのですが、万葉集を読んでいると、すごく俯瞰で物事を見ているんですよ。詠まれたのは1300年近く前のこと。その当時は、もちろん電車も飛行機もなく、知ることができる世界は限られていたはずだし、それこそ宇宙から地球を見たこともないのに、自分自身の命のことを思うとき、感覚がものすごく宇宙的なんです。

思いも時間空間を超えている。当時は通い婚で、いつ来てくれるか分からない相手に向けて書いているんです。そして「待つ」んです。季節感を詠うときにも、桜は1年に1度しか咲かないから、きちんと待つ。冬には、春の桜を思って待っている。でも、現代人は求めてしまうじゃないですか、今すぐに桜が見られる場所を。それが大事なスケール感を奪っていると思うんです。宇宙というスケール感を育むのは待つという行為なんじゃないかな。山々も川筋も日本の始まりの頃と変わらない、奈良の藤原京だったあたりの風景を撮りながら、そんなことを考えています。

河瀬直美

奈良市生まれ。1997年『萌の朱雀』がカンヌ国際映画祭でカメラドール(新人監督賞)を、2007年『穠の森』がカンヌ国際映画祭でグランプリを獲得。2010年、『玄牝』がスペイン・サンセバスチャン国際映画祭で国際批評家連盟賞を受賞するなど、受賞多数。現在、奈良県飛鳥地方を舞台にした映画『朱花の月』を制作中。「なら国際映画祭」では、エグゼクティブ・ディレクターを務めている。<http://www.kawasenaomi.com/>

映画『玄牝—げんびん—』自主上映受付中！  
あなたの町や学校での上映を希望される場合は、下記へお問い合わせ。  
組画 ☎0742-27-2216  
deguchi@kumie.jp www.genpin.net





## EARTHLING 04

# 石川直樹

Naoki Ishikawa

写真家

世界中のあらゆる地域を移動し続けながら  
写真と文章を通じて世界と人間のあり方  
をつぶさに見つめ、伝えてきた石川直樹。

この春、2度目のエベレスト登山を計画する彼に  
その旺盛な活動を支える思いを聞く。

取材・文●井出幸亮 写真●伊藤徹也

——石川さんはこれまでも現在も、世界中を旅しているわけですが、何を求めて移動を続けていらっしゃるのでしょうか。

**石川** 僕自身も含めて、現代では色々なものをメディアを通した2次情報で見聞きする機会がものすごく多いわけですが、そうするとつい「見たつもり」「行ったつもり」になってしまうんですね。実際に、メディアテクノロジーを使えばどこにも行かずに色々なことを擬似体験できてしまうんだ、という類の言説はこれまでにものすごく存在してきましたけれど、やはり世界は全然違って、写真で見たイメージや活字で得た情報は、幻想というか、ありのままの世界ではないわけですよね。ケニアでも、パリでも、その地名を聞くだけでパッと頭に思い浮かぶイメージが誰でもあるでしょうけども、それは過去に見たことのあるすごく印象的な1枚の写真であったり、そういったものから発生する「作

られたイメージ」であって、本当の世界の姿ではない。僕には、その姿を自分の目で確かめ、実際どうなっていて、自分はどうやって感じるのかを自ら体を通して知っていきたくて、という思いがあるんです。

僕たちが普段見慣れた「世界」の姿というのは、あるひとつのレイヤーの中で見た世界であって、その姿が、ある別の見方からすると全く違って見えたりすることがある。そういった「新しい世界地図」みたいなものを、写真や文章で伝えていけたらいいなと思っています。

例えば、最新の写真集『CORONA』では、「ポリネシア・トライアングル」というものがキーワードになっていて、ハワイ諸島、ラパ・ヌイ（イースター島）、アオテアロア（ニュージーランド）を結んだ海洋地域をテーマにしています。ル・クレジオが「見えない大陸」と呼んだ、ヨーロッパの約3倍もの面積があるにもかかわらず、

しかも海によって隔てられた島々であるにもかかわらず、類似する文化が広がっている地域。そこには、大陸に暮らす多くの人間が考えているような、「隔てるもの」として海があるのではなく、「繋げるもの」として海がある。そういった僕自身の認識をあの写真集で提示したつもりですし、『ARCHIPELAGO』では島の連なりとして世界をとらえ直すということを試みました。

これまでも、辺境を「辺境そのもの」として提示した写真家はたくさんいるし、例えば南の島々を「パラダイス」であり「楽園」として撮った写真は数多く存在していますが、そうではなくて、旅をしながら、別のレイヤー、つまり見慣れたものとはまた少し違う世界があるということを写真で表明しているだけなんです。ちょっとだけ見方を変えれば、世界の姿がガラッと変わっていくという、そのわずかなきっかけ

になるような仕事が可能になったらそれは嬉しいですね。

——そのような「世界の姿がガラッと変わる」という体験を、過去に石川さんご自身がたくさんされてきたということでしょうか。

**石川** 例えばエベレストと言うと世界の最高峰で、極地の中の極地で、登山は大冒険である、というようなひとつのイメージがあると思いますよね。でも、実際にその地元に住んでいるシェルパ族にとっては全く認識が違って、彼らはすでにこの山の8848メートルの頂上までを、自分たちの仕事のフィールドとして認識しているわけです。その圏域の広さは、僕たちが考えている範囲をはるかに凌駕している。北極点や南極点も含めて「極地」というものの認識が徐々に変化しつつあるのを感じます。

ヒマラヤ山麓に住む人々には、日本に住み、高峰と無縁に暮らしている人とは全く違う認識

が存在するわけですね。実際に僕自身、これまでに各地で彼らのように自然と近しく暮らしている人たちに出会い、話を聞く中で、自分が見慣れていた世界がガラガラと崩れていって、全く新しい世界に変わっていくような体験してきました。そういう体験を経て、複数のレイヤーの存在を目の前の世界に感じられるようになると、単純に面白いし、日々が豊かになるような気がするんです。

それは何も辺境だけではなくて、毎日通っている通勤路でもそうだし、近所の散歩でも何でもいいんですが、もう見慣れてしまって何も感じないような場所が、少し視点が変わるだけで、ガラッと別な見方になって、全く新しい世界が目の前に立ち上がる。とても優れた映画を見て映画館を出た後や、電車の中ですごく良質の小説を読んで改札を出た後、いつもの風景が少し違って見える、みたいな体験ってあるでしょう。アーティストと呼ばれる人間は、そのような世界の別の見方を提示していける人だろうと思っているし、それこそができあがった作品を芸術たらしめている最も重要な根幹だと思っているので、僕自身もそんな体験のきっかけを提示できるようになればいいなと思っています。

## 世界に対する驚きがないと写真は撮れない。

——アートとしての数ある表現方法の中で、特に写真というメディアを選んで活動されていることの理由はこういったところにあるのでしょうか。

**石川** 写真には、撮影した現場では自分が見えていなかったものとか、色々な偶然が写り込んできるのが面白いんですね。空に鳥が飛んでいたり、人が走っていたり。曇っていたり、晴れていたり、自分がコントロールできない部分がたくさんある。その場その場で撮影した写真を見直していくことで、新しい発見がたくさんあって、自分の旅が、どんどん膨らみを持って広がっていくような感覚があるんです。時間も空間も超えて、あるひとつの旅がどんどん変化していく、そのためのひとつの鍵がぼくにとって写真であるということです。

海外で撮影してきて、日本に帰って現像して、どの写真を焼くか選んだり、あるいは写真集を編むために構成を考えたり、展示をするにあたって改めて写真を選ぶという作業をしていく中で、自分が知らなかったもの、忘れていたものがどんどん立ち上がってくる。そして「こういう旅だった」と自分の中で反芻していたものが組み替えられ、新しい旅に変わっていく。それを与えてくれるものが写真だったので、僕は写真に出会えてすごくよかったなと思うわけです。

それは先程の「新しい世界地図を作る」という話と同じで、世界は流動し続けているにも関わらず、自分の記憶の中で何か固定されてしまうと、驚きがなくなってしまう。身の回りのことを全て知ったつもりになってしまうとつまらなくなるし、時間は本当に矢のように過ぎてゆく。やはり驚き続けないと写真は撮れません。どんどん世界のあり方を組みかえていって、新しいものと出会いたいんです。

例えば自分が赤ちゃんの頃と比べると、世界に対して驚きがどんどん少なくなっているでしょう。だって、今この僕の目の前にある紙も机もコップも米も録音機材も、僕は全部知っているけど、生まれたばかりの頃は何も知らなかったわけで。それらを触ったり、匂いを感じたりしながら知覚していったのに、今はそういった感覚が全然なくなっちゃって、知っているつもりになっているんですね。加齢とともに

どんどん知っているつものことが増えていって、世界に対する驚きをなくしていくと、時間がただ過ぎ去っていくのを待つだけになってしまう。そうすると、あつという間におじいさんになっちゃいますよ。

——世界に対する新しい見方をメディアなどを通じて表現しているのは、そういった面白さ、楽しさを自分以外の方々にも知ってほしいという気持ちからですか。

**石川** 知ってほしいというよりは、自分がただ面白がっているというだけですね。それがプライオリティーとして1番にある。人を楽しませようとか、人の心を変えようとかということよりも、まず自分の興味や関心がある。僕は誰かのために写真を撮っているわけではなくて、自分の驚きに対してシャッターを切っているんです。まずやっぱり自分の反応とか喜びみたいなものがあるって、その上で溢れ出してくるものを提示しているということです。ここをこう撮ったら人が褒めてくれるからといって写真を撮ったりすると、写真はすぐに駄目になるし、見破られてしまう。世界はちょっと目を転じると全然別のものが見えてくるし、面白いものに溢れているんだよ、というぐらいのことしか僕には言えませんよ。

そういう意味では、世界を知るためにずっと旅を続けてきたけれども、基本的な気持ちは高校生の時に初めてインドへ一人旅した頃から本当に変わってないですね。もちろん、旅をした

# パラボラアンテナが立って 電気が導入された藁の家があって 素晴らしい人もいれば しょうもない奴もいるという 世界の姿を見なきゃいけないと思う。

だけでは世界を知ることなんてできません。自分が知らないものとか、未知なものを自分で見て、色々なことを感じながら、そこにあるものを受け入れていくこと。最初からあるイメージを固めた上で真っすぐ進んでいくよりは、わき道にそれて、何か知らないことに会って、枝葉に分かれて進んでいくものの方が全然面白いという思いは今も昔も変わらないです。

## 行列のできる山って超面白いと思う。

——石川さんが高校生の頃から現在までという、まさにインターネットを始めとしたテクノロジーの進化と普及によって、世界の姿が大きく変化した時代だと思いますが、石川さんはそういった状況をどのように捉えていますか。

**石川** ヒマラヤの麓に住むシェルパたちの多くも今では携帯電話を使うようになりましたけども、それは彼らの本質まで変えてはいなくて、やはり彼らにとっては今も、エベレストに登ることよりも冬場のヤクの世話のほうが大変だったりするという生活があるわけです。そういう世界というのはずっと変わらずにあって、僕から見れば、グローバリゼーションによって世界の全てが均質化されているなどと簡単に言い切れることはできません。表面的には、誰もが携帯を使ったりテレビを見たりしていますけど、本質的な部分まで変化したかというところではな

いし、またそれによって表面的な部分で文化が失われていっても、そこで新しいものが生み出されているわけだから、悲観的でも楽観的でもないんです。

僕は伝統文化が失われていることに対して、それを一方的に悲しがったり、惜しんだりする気持ちはあまりなくて。もちろん自分が思い入れのある地域の、思い入れのある文化だったり、知恵を持っていたおじいさんとかがなくなったりして、そういうものが消えていくのは悲しいことなんですが、でも、その分新しい若い人たちの中で何かが生まれているという気がしている。それが具体的に何だと言われても困るけれど、僕は単純に、「頭の中から爪先まで全身を使って生きている人」に惹かれているんです。そういう人たちの知恵が、どのように今の姿としてあるのかをつぶさに見ているのが好き、というだけで、それを記録して残すことに対して特別に使命感をもっているわけではありません。

現在の世界を詳細に記録していけば、それがアーカイブとなり、後世に貴重な記録になることは分かりきっているのですが、それは伝統文化だけでなく、ありとあらゆるものがそうであるというだけですからね。そこらへんの電信柱だって、お店の看板だって何でもそうですよ。

そういった意味で言うと、僕はこの3月末からネパールに行って10年ぶりにエベレストに登って写真を撮ろうと思っていますが、そのルポルタージュは、この2011年という現在のエ

ベレストというものを詳細に伝えたいと思っています。

一般にエベレストの登山記というと、とても大変な、挑戦の記録みたいなものがほとんどですが、今は現地の環境が全く変わっているんです。ベースキャンプは村みたいになって、3Gの携帯電話がつながるし、パーみたいな空間を作っている隊もいる。昔はボロボロの服を着ていたシェルパ族も、今はアウトドアブランドの最新のハイテクウェアも着ていて、すごくスマートだったりします。頂上に二十何時間も滞在したり、また十回以上も登頂したというシェルパもいる。先ほど話したとおり、極地の中の極地であるエベレストの頂上でさえも、もはや仕事の間という意味で、生活圏の一部としてとらえているシェルパもいるんだという現状があるんです。日本人の多くの人にとっては、今でもエベレストと言えど一生一代の登山であって、鉢巻き絞めて命がけで登る「孤高の挑戦」みたいなイメージがあるのかもしれませんが、今はそうではなくなってきているという現状をきちりルポしたいなと思っています。

——そういった時代の変化に対して、批判的な声も当然ながらあるわけですよね。

**石川** 例えば伝統的な藁の家を撮ったときに、民家の隣に衛星放送のパラボラアンテナがあったら嫌だな、と感じる写真家はいっぱいいると思うんです。実際、そういう時にパラボラアンテナを外して、素朴な家だけを撮って、「こん

な辺境の場所に行ってきた」というのを提示する人もいるでしょう。文章でももちろん同じで、携帯音楽プレーヤーで音楽を聞きながら歩いている先住民の若者のことは書かないけども、伝統的な文化を守って生きているおじいさんのことだけは書く、というような人がいるかもしれない。でも、僕はやっぱりパラボラアンテナが立って、電気が導入された藁の家があって、素晴らしい人もいればしょうもない奴もいるという世界の姿を見なきゃいけないと思う。そういうものを含めて、ありのままの世界のあり方の面白さを提示したい。

『ARCHIPELAGO』のなかには、祭祀や伝統舞踊の写真があって、そこには着物を着て踊っている人の周りに、カメラをもった観光客などが写ってしまっているんですが、僕にとってはそれは当たり前の世界なんですよ。そこにその人がいたんですから。富士山の写真集『Mt. Fuji』を出した後も、「石川さん、富士山にいっぱい登山客が増えて、行列なんかもできちゃって、富士山のことどう思っているんですか」みたいな、ある種の誘導尋問的にネガティブな質問をする人がいるわけですが、僕は夜中にヘッドランプのちんどん行列ができる山って超面白いじゃないか、と思ってるんです。そんな風景が見える山なんて、世界中を探してもどこにもないわけで、そういうことも含めて、全部肯定的に見ているんです。

——これから形になる予定の、進行中のプロジェクトはありますか。

**石川** 先ほどお話ししたエベレストのルポの他に、スンドラランド（現在タイランド湾～南シナ海の海底に没している古代の沖積平野）をテーマに撮影をしています。昔大陸だったスンドラランドは人類監藍の地とされ、そこから人類が拡散していったと言われていたんですね。アフリカから来た人類がそこにたどり着いて、ここからさらに拡散していった。すでにフィリピンやバリ島のあたりは取材を終えていて、全てまとめれば『ARCHIPELAGO』、『CORONA』、『SUNDALAND』で3部作が完結する予定です。

他にも進行中のプロジェクトは色々ありますが、いつどのような形でまとまるか、全てが決まっているわけではありません。最初から着地点を固定してしまわずに、日々変わっていく世界や自分を受け入れながら活動していきたいと思っています。こういった環境は、ある人にとっては不安な状況かも知れない。でも、誰だって子どもの頃は知らないものだらけで、もちろん不安なんですけど、それ以上に楽しく生きていたでしょう。そういった生き方が理想的だと思いますね。ただ、僕自身が他人に対して「こんなふうには生きればいいんだ」と何か啓蒙的なメッセージを言っても不毛な感じがして。とにかく、世界は楽しいものというか、面白いことにあふれていて、ちょっと目を転じると、全然別のものが見えてくるんだと、僕はそう思って生きているよというぐらいのことしか、やっぱり言えないんですけどね。

石川直樹

1977年東京生まれ。東京芸術大学大学院美術研究科博士後期課程修了。2000年、地球縦断プロジェクト[Pole to Pole]に参加して北極から南極まで人力で踏破。01年チョモランマに登頂、七大陸最高峰登頂の最年少記録(当時)を塗り替えた。写真集『NEW DIMENSION』(赤々舎)、『POLAR』(リトルモア)により、08年日本写真協会新人賞、講談社出版文化賞を受賞。同年、著書『最後の冒険家』(集英社)で第6回開高健ノンフィクション賞受賞。



それで、50年後の私個人はといえば、かなり複雑な気分である。

1951年に生まれた私は、さまざまなグローバル化をライブで体験してきたし、ごく自然に、この地球そのものを「故郷」と感じる。そう思うのが、感覚的にも一番心地良かったからだ。「地球人」としての私の意識は、この惑星の自然や文化の多様性をなによりも大切に考えてきたが、しかしその同じ意識が経済のグローバル化を推進し、環境や生活を均一化し、多様性を抹殺してきたのなら、なんて矛盾に満ちた悲しみだろう。地球社会を平衡化させていくグローバル化なんて、私はまっぴらごめんなのだ。

歩いて旅する人には肌を通してわかることだが、この惑星は生態学的地理学的な同質性によってさまざまなユニットに分かれており、気候風土といったも良いかもしれないが、そういう現実の方が、国家の境界や行政界より私にはずっとピンと来る。私が地球人と言う場合、こうした多領域が連続して共存する惑星環境への愛着であり、均一な地球社会を念頭に置いたものではない。

友人の文筆家、星川淳は、彼自身のことを「在日地球人」と規定していたが、この感覚は私にも見事に当てはまる。それはかつてステイニングが歌った「イングリッシュマン・イン・ニューヨーク」、つまり「リーガル・エイリアン」、合法的な異邦人に通じる感覚で、その点ではつねに居心地の悪さを感じてきた。しかし今はそれどころではない。そもそも私を地球人と感じさせている根拠、生態学的あるいは文化的多様性そのものがこの星から消え去ろうとしているのだ。言ってみれば、故郷喪失の危機にも等しい。

私が思いつくことなどが知れているが、しかしこれだけは信じられると思うのは、拡大成長の神話は確実に終わった、あるいは終わらさねばならないということだ。地球人としての意識を維持したまま、地球平衡化に立ち向かうとしたら、マッチョな物質的拡大思考に終止符を打ち、われわれは創造的な縮小に向かわねばならない。GDPが中国に抜かれてもインドに抜かれても、かまわないじゃないか。国の理念として、経済的な繁栄より精神的な充足を重視するブータンのような国だってある。われわれには、もっと注力すべきことがあるはずだ。

60年代に言われていたより長持ちはしているものの、そろそろ石油も底をつき始める。枯渇しないままでも、湯水のように使うには値段が高すぎる状況に

なっていくだろう。石油に代わる化石燃料もあれこれ取沙汰されるけれど、真つ当に考えれば、バック

ミンスター・フラーが『宇宙船地球号操縦マニュアル』で言っていたように、地球としてのエネルギー収支を考えていくしか他にない。化石燃料は地球社会のメインエンジンに点火するためのセルフスターターなのであり、ならば私たちはあれこれ考えず、化石燃料を燃やして、まずこの地球社会に自然エネルギーの利用システムを構築しなければならぬ。絶妙な位置で燃え続けるエネルギー供給母船太陽号や重力パイプレーターである月号、そして地球号内部の高圧環境が生み出す地熱や振動に注目して、それらが生み出すエネルギーだけでやりくりしていく収支を考えねばならない。こう言うとき、自然エネルギーだけではわれわれの社会の活動を維持できないと言われるが、それなら逆に、それではまかなえるだけのエネルギーしか使わない社会をつくれればいい。それが創造的縮小というものだ。物質的な意味での縮小は恐れるに足らない。絶対に避けねばならないのは想像力の縮小なのだが、現実はその逆になっている。

とはいえ、今の政治や社会がこうした課題に応えてくれるのか、自信はない。ならばどうするか？ こう言ってしまうば元も子もないけれど、結局は個人個人の美意識に戻るしかない。自分自身で鏡を見て、そんな生き方は醜くないか、心の声に耳を傾ける。群れて、美意識を平均化してはいけないし、他人を理由にする必要もない。個人の美意識に従って、個人にできることをやりぬくだけだ。

この星の姿を初めて見た時のように、今、あらためて自分自身の姿を見つめる。  
50年後の私自身の決意である。

芹沢高志

1951年東京生まれ。神戸大学理学部数学科、横浜国立大学工学部建築学科卒業。89年にP3 art and environmentを開設し、さまざまなアート、環境関係のプロジェクトを展開する。国際現代アート展「デメテル」(2002年)総合ディレクター、横浜トリエンナーレ2005キュレーター、別府現代芸術フェスティバル「混浴温泉世界」(2009年)総合ディレクター。著書に『この惑星を遊動する』、『月面からの眺め』、訳書にバックミンスター・フラー『宇宙船地球号操縦マニュアル』、エリッヒ・ヤンツ『自己組織化する宇宙』(共訳)などがある。

## EARTHLING 05

ひとつの時代が  
終わろうとしている

寄稿 芹沢高志

思い返してみよう。今から半世紀前の1961年

4月12日、私たち人類は、初めてこの目で自分自身の姿を見た。そして、鏡に一瞥を投げた思春期の少女のように、驚きと高ぶり、怖れと恍惚が入り交じるなか、思わず口に出したのだ。「地球は青かった」と。

ソ連の空軍少佐、ユーリー・ガガーリンが「東方」という名の宇宙船に乗って地球の周りを一周して以来、私たちの意識は確実にグローバル化していった。

頭のなかで想像しているのと、実際にこの目で見るのでは、やはり大きな違いがある。あの日ガガーリンがたったひとりで見えた青く輝く地球の姿は、その後数々の映像として、繰り返し、繰り返し、私たちの日常に流れ込んでくる。地球という惑星の姿が、みんなにとって、ごくごく身近なものになっていったのだ。そしてそれと呼応するように、私たちの経験のステージもゆっくりと変わっていった。

今でもときどき思い出します。1964年のたぶん10月17日、母がムキになって台所でキャベツを洗っていた。「なんでそんなにしつこく洗うの？」中国が核実験をしたのよ。死の灰がついてるといけないじゃない。これからは雨にぬれちゃいけないよ。髪の毛が抜けちゃうからね」

私は13歳で、当時は国交もなかった中国は遠い異国にすぎなかった。しかしその、日常から遠く離れた世界の出来事が、私の母に、必死にキャベツを洗わせる。そのつながりがとてつもなく不思議でならなかった。私は初めて、世界がくっついていることを実感した。

おそらく、あの頃、みんながそんなふうに予感を持ちはじめたのだろう。環境に放出されたDDTが生態系に忍び込み、食物連鎖で濃縮されて、

世界のすべてを汚染していく。春が来ても花は咲かず、鳥も啼かず、『沈黙の春』が来るかもしれないと、生物学者レイチェル・カーソンが警告の書を出版したのはその2年前、1962年のことだった。

通信衛星を使った日米間のテレビ中継実験が成功したのは1963年11月23日だが、そこに映し出されたのは、前日のジョン・F・ケネディ暗殺に沈み込んだニューヨークの街だった。その後テレビは、世界の出来事を映像として、次から次へと日々の茶の間に投げ込んでくる。世界はこんなにも広く、こんなにも多様で、こんなにも多くの出来事が起こっている、私たちは日々の暮らしのなかで知ることになった。

あれから50年が経つ。インターネットの普及や経済のグローバル化といった新しい動きが進展しているが、ガガーリンから始まった大きな流れは変わっていないだろう。そう、流れの大筋は変わっていない。しかし、また別のステージが現れはじめているような、そんな予感も持つのである。

なぜ、そう思うのか？ それは、私たちみんながなんとなく苛立っているからだ。

ここ日本では、いやおそらくは欧米の多くの国々でも、わけのわからぬ閉塞感が社会を覆いつくしている。その一方で、中東各地では大きな構造変動が、今まさに起こりつつある。直接の理由はさまざまでも、とにかくこれまでのやり方がうまくいかななくなっているということだ。

意識のグローバル化は科学技術や経済や文化のグローバル化も加速させ、環境やサービスや製品やライフスタイルの均一化が急速に進んで、これまで多様だったローカルな生の現場は極端に消耗しきっている。少なくとも、世界の巨大都市に限って言えば、すでにどこの街に行つたところで、だいたいはいは同じようなもの。個性もなく、ただ高層ビルが立ち並ぶ。また技術や経済は軽々と国境を越え、約束事としての国境を、だんだん意味のないものに変えつつある。次々生まれてくる山積みの問題を前にして、どの国家も有効な突破口を見いだせない。

言い過ぎだという意見もあるかもしれないが、私はこれまでの国家という枠組み自体が、そろそろ老朽化しつつあるのではないかと思う。それは体制とかイデオロギーの問題ではない。国家、あるいは国民国家という概念そのものが、崩れはじめているのではないかと感じる。

# EARTHLING Chronology

## 50年の地球人年表

人類が宇宙から地球を見て半世紀。次の50年を考える  
手がかりのひとつとして、環境や地球意識に関する事柄を中心に、  
この50年を駆け足で振り返ってみよう。

イラスト●武田英志



ケネディが第35代米大統領に就任  
ビートルズがキャバークラブで初公演

ユーリイ・ガガーリンが  
ボストーク1号で地球一周  
「地球は青かった」以外にもロシアでは「パイエーハレ=さあ、いくぞ」という言葉が有名だとか。未知の世界へと向かうその気持ちが、宇宙から地球を振り返る初めての体験につながった。

アンディ・ウォーホル  
「キャンベル・スープ」発表  
東ドイツがベルリンの壁を建設

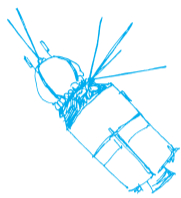
1961



米国フレンドシップ号が地球3周  
ジョン・グレン宇宙飛行士

レイチェル・カーソン  
「沈黙の春」出版  
DDTなどの農業や殺虫剤が生態系や人間に及ぼす危険性を訴え、有機塩素系殺虫剤の使用禁止に結実。環境保護運動が世界に広がるきっかけを作った。

1962



マーシャル・マクルーハン  
「グーテンベルクの銀河系」  
キューバ危機

1963

バックミンスター・フラー  
「宇宙船地球号操作マニュアル」出版  
地球をひとつの宇宙船として捉え、発想の転換と新たな思考の形成を促した書。エコロジー・ムーブメントや全地球主義的思考の原点ともいわれる。

テレビアニメ第一号  
「鉄腕アトム」放映開始  
ケネディ大統領暗殺

初めて日米間の  
衛星中継実験に成功

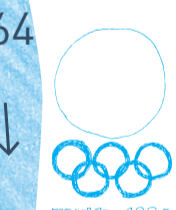
JFK



米国防総省ARPANETが始動  
カリフォルニア大学、スタンフォード研究所、ユタ大学に設置された4つのコンピュータが世界で初めてネットワークでつながれた。インターネットが産声を上げた瞬間だった。

1964

太平洋横断海底ケーブル完成  
トンキン湾事件  
東京オリンピック  
ビエール・カルダン  
「スペース・エイジ・ファッション」を発表



TOKYO 1964

1965

アメリカがベトナム空爆開始  
マルコムX暗殺

ソ連のアレクセイ・レオーノフ  
人類初の宇宙遊泳  
中国で文化大革命が始まる

1966



日本の総人口が1億人を突破  
この時世界人口は34億人で現在の約半分  
ソ連の無人月探査機  
ルナ9号が初めて月面着陸  
「ウルトラマン」放映

1967

「アポロ1号」が  
訓練中に火災事故

ソ連の宇宙船ソユーズ  
1号が着陸に失敗

中国が初の水爆実験

チェ・ゲバラが  
ボリビアで処刑される



あさま山荘事件  
1972

ニクソン・ショック  
為替の変動相場制が始まる

日本に環境庁が発足

ソ連、世界初の  
宇宙ステーション  
「サリュート1号」打ち上げ

第三次印パ戦争  
バングラデシュが独立

世界経済フォーラム  
(通称「ダボス会議」)設立

1971

植村直己が日本人初の  
エベレスト登頂

中国が初の人工衛星  
「東方紅1号」打ち上げ

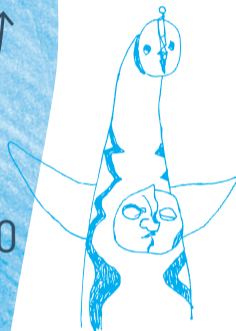
デニス・ヘイズらが  
アースデイ開催

よど号事件  
(日航機ハイジャック)

大阪万博(EXPO70)開催  
岡本太郎「太陽の塔」

日本初の人工衛星  
「おすみ」打ち上げ成功

1970



日本に宇宙開発事業団発足  
(JAXAの前身)

リビアでカダフィによる  
無血革命

ウッドストック・  
フェスティバル開催

「アポロ11号」が  
人類初の月面有人着陸  
東大安田講堂事件

1969



アラン・ケイが  
「ダイナブック構想」を発表

深海掘削船グローマー・  
チャレンジャー号が初航海

アメリカで「ホールアース  
カタログ」創刊

フランスで5月革命  
(パリ五月革命)

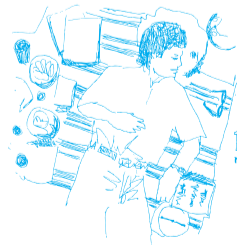
映画「2001年  
宇宙の旅」公開

マーチン・ルーサー・  
キング牧師暗殺

ブラハの春  
(チェコ自由化政策)

1968

世界初の地球のカラー写真  
青い地球の姿は、この年、写真という  
メディアを通して全世界の人に認識さ  
れた。アメリカの応用技術衛星が撮影  
した写真は翌年秋に発行された「ホー  
ルアースカタログ」の表紙を飾った。



「アポロ1号」が  
訓練中に火災事故

ソ連の宇宙船ソユーズ  
1号が着陸に失敗

中国が初の水爆実験

チェ・ゲバラが  
ボリビアで処刑される

「アポロ1号」が  
訓練中に火災事故

ソ連の宇宙船ソユーズ  
1号が着陸に失敗

中国が初の水爆実験

チェ・ゲバラが  
ボリビアで処刑される

「アポロ1号」が  
訓練中に火災事故

ソ連の宇宙船ソユーズ  
1号が着陸に失敗

中国が初の水爆実験

チェ・ゲバラが  
ボリビアで処刑される

「アポロ1号」が  
訓練中に火災事故

ソ連の宇宙船ソユーズ  
1号が着陸に失敗

中国が初の水爆実験

チェ・ゲバラが  
ボリビアで処刑される

「アポロ1号」が  
訓練中に火災事故

ソ連の宇宙船ソユーズ  
1号が着陸に失敗

中国が初の水爆実験

チェ・ゲバラが  
ボリビアで処刑される

「アポロ1号」が  
訓練中に火災事故

ソ連の宇宙船ソユーズ  
1号が着陸に失敗

中国が初の水爆実験

チェ・ゲバラが  
ボリビアで処刑される

「アポロ1号」が  
訓練中に火災事故

ソ連の宇宙船ソユーズ  
1号が着陸に失敗

中国が初の水爆実験

チェ・ゲバラが  
ボリビアで処刑される

「アポロ1号」が  
訓練中に火災事故

ソ連の宇宙船ソユーズ  
1号が着陸に失敗

中国が初の水爆実験

チェ・ゲバラが  
ボリビアで処刑される

「アポロ1号」が  
訓練中に火災事故

ソ連の宇宙船ソユーズ  
1号が着陸に失敗

中国が初の水爆実験

チェ・ゲバラが  
ボリビアで処刑される

「アポロ1号」が  
訓練中に火災事故

ソ連の宇宙船ソユーズ  
1号が着陸に失敗

中国が初の水爆実験

チェ・ゲバラが  
ボリビアで処刑される

「アポロ1号」が  
訓練中に火災事故

ソ連の宇宙船ソユーズ  
1号が着陸に失敗

中国が初の水爆実験

チェ・ゲバラが  
ボリビアで処刑される

「アポロ1号」が  
訓練中に火災事故

ソ連の宇宙船ソユーズ  
1号が着陸に失敗

中国が初の水爆実験

チェ・ゲバラが  
ボリビアで処刑される

「アポロ1号」が  
訓練中に火災事故

ソ連の宇宙船ソユーズ  
1号が着陸に失敗

中国が初の水爆実験

チェ・ゲバラが  
ボリビアで処刑される

「アポロ1号」が  
訓練中に火災事故

ソ連の宇宙船ソユーズ  
1号が着陸に失敗

中国が初の水爆実験

チェ・ゲバラが  
ボリビアで処刑される

「アポロ1号」が  
訓練中に火災事故

ソ連の宇宙船ソユーズ  
1号が着陸に失敗

中国が初の水爆実験

チェ・ゲバラが  
ボリビアで処刑される

「アポロ1号」が  
訓練中に火災事故

ソ連の宇宙船ソユーズ  
1号が着陸に失敗

中国が初の水爆実験

チェ・ゲバラが  
ボリビアで処刑される

「アポロ1号」が  
訓練中に火災事故

ソ連の宇宙船ソユーズ  
1号が着陸に失敗

中国が初の水爆実験

チェ・ゲバラが  
ボリビアで処刑される

「アポロ1号」が  
訓練中に火災事故

ソ連の宇宙船ソユーズ  
1号が着陸に失敗

中国が初の水爆実験

チェ・ゲバラが  
ボリビアで処刑される

「アポロ1号」が  
訓練中に火災事故

ソ連の宇宙船ソユーズ  
1号が着陸に失敗

中国が初の水爆実験

チェ・ゲバラが  
ボリビアで処刑される

「アポロ1号」が  
訓練中に火災事故

ソ連の宇宙船ソユーズ  
1号が着陸に失敗

中国が初の水爆実験

チェ・ゲバラが  
ボリビアで処刑される

「アポロ1号」が  
訓練中に火災事故

ソ連の宇宙船ソユーズ  
1号が着陸に失敗

中国が初の水爆実験

チェ・ゲバラが  
ボリビアで処刑される

「アポロ1号」が  
訓練中に火災事故

ソ連の宇宙船ソユーズ  
1号が着陸に失敗

中国が初の水爆実験

チェ・ゲバラが  
ボリビアで処刑される

「アポロ1号」が  
訓練中に火災事故

ソ連の宇宙船ソユーズ  
1号が着陸に失敗

中国が初の水爆実験

チェ・ゲバラが  
ボリビアで処刑される

「アポロ1号」が  
訓練中に火災事故

ソ連の宇宙船ソユーズ  
1号が着陸に失敗

中国が初の水爆実験

チェ・ゲバラが  
ボリビアで処刑される

「アポロ1号」が  
訓練中に火災事故

ソ連の宇宙船ソユーズ  
1号が着陸に失敗

中国が初の水爆実験

チェ・ゲバラが  
ボリビアで処刑される

「アポロ1号」が  
訓練中に火災事故

ソ連の宇宙船ソユーズ  
1号が着陸に失敗

中国が初の水爆実験

チェ・ゲバラが  
ボリビアで処刑される

「アポロ1号」が  
訓練中に火災事故

ソ連の宇宙船ソユーズ  
1号が着陸に失敗

中国が初の水爆実験

チェ・ゲバラが  
ボリビアで処刑される

「アポロ1号」が  
訓練中に火災事故

ソ連の宇宙船ソユーズ  
1号が着陸に失敗

中国が初の水爆実験

チェ・ゲバラが  
ボリビアで処刑される

「アポロ1号」が  
訓練中に火災事故

ソ連の宇宙船ソユーズ  
1号が着陸に失敗

中国が初の水爆実験

チェ・ゲバラが  
ボリビアで処刑される

「アポロ1号」が  
訓練中に火災事故

ソ連の宇宙船ソユーズ  
1号が着陸に失敗

中国が初の水爆実験

チェ・ゲバラが  
ボリビアで処刑される

「アポロ1号」が  
訓練中に火災事故

ソ連の宇宙船ソユーズ  
1号が着陸に失敗

中国が初の水爆実験

チェ・ゲバラが  
ボリビアで処刑される

「アポロ1号」が  
訓練中に火災事故

ソ連の宇宙船ソユーズ  
1号が着陸に失敗

中国が初の水爆実験

チェ・ゲバラが  
ボリビアで処刑される

「アポロ1号」が  
訓練中に火災事故

ソ連の宇宙船ソユーズ  
1号が着陸に失敗

中国が初の水爆実験

チェ・ゲバラが  
ボリビアで処刑される

「アポロ1号」が  
訓練中に火災事故

ソ連の宇宙船ソユーズ  
1号が着陸に失敗

中国が初の水爆実験

チェ・ゲバラが  
ボリビアで処刑される

「アポロ1号」が  
訓練中に火災事故

ソ連の宇宙船ソユーズ  
1号が着陸に失敗

中国が初の水爆実験

チェ・ゲバラが  
ボリビアで処刑される

「アポロ1号」が  
訓練中に火災事故

ソ連の宇宙船ソユーズ  
1号が着陸に失敗

中国が初の水爆実験

チェ・ゲバラが  
ボリビアで処刑される

「アポロ1号」が  
訓練中に火災事故

ソ連の宇宙船ソユーズ  
1号が着陸に失敗

中国が初の水爆実験

チェ・ゲバラが  
ボリビアで処刑される

「アポロ1号」が  
訓練中に火災事故

ソ連の宇宙船ソユーズ  
1号が着陸に失敗

中国が初の水爆実験

チェ・ゲバラが  
ボリビアで処刑される

「アポロ1号」が  
訓練中に火災事故

ソ連の宇宙船ソユーズ  
1号が着陸に失敗

中国が初の水爆実験

チェ・ゲバラが  
ボリビアで処刑される

「アポロ1号」が  
訓練中に火災事故

ソ連の宇宙船ソユーズ  
1号が着陸に失敗

中国が初の水爆実験

チェ・ゲバラが  
ボリビアで処刑される

「アポロ1号」が  
訓練中に火災事故

ソ連の宇宙船ソユーズ  
1号が着陸に失敗

中国が初の水爆実験

チェ・ゲバラが  
ボリビアで処刑される

「アポロ1号」が  
訓練中に火災事故

ソ連の宇宙船ソユーズ  
1号が着陸に失敗

中国が初の水爆実験

チェ・ゲバラが  
ボリビアで処刑される

「アポロ1号」が  
訓練中に火災事故

ソ連の宇宙船ソユーズ  
1号が着陸に失敗

中国が初の水爆実験

チェ・ゲバラが  
ボリビアで処刑される

「アポロ1号」が  
訓練中に火災事故

ソ連の宇宙船ソユーズ  
1号が着陸に失敗

中国が初の水爆実験

チェ・ゲバラが  
ボリビアで処刑される

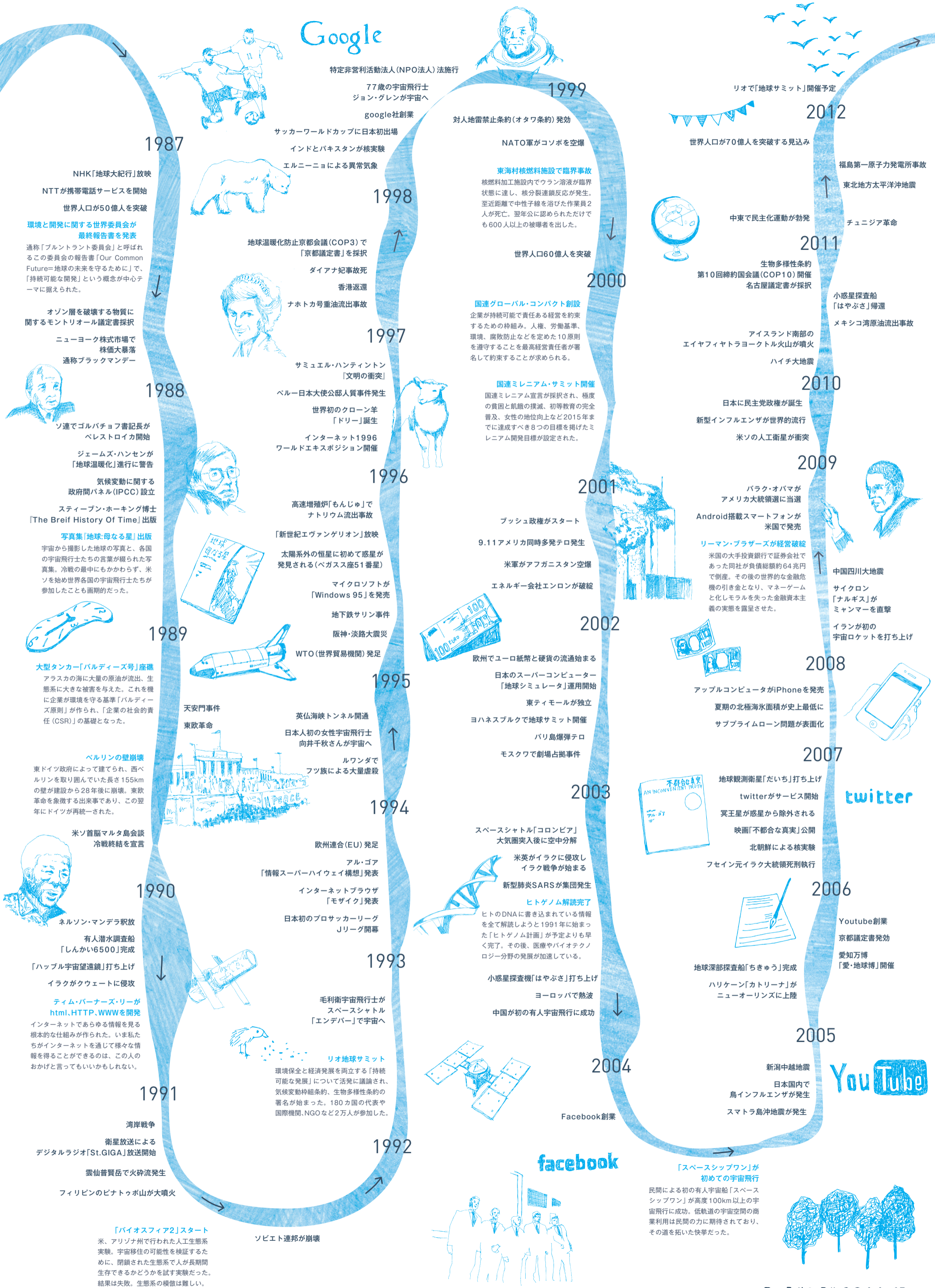
「アポロ1号」が  
訓練中に火災事故

ソ連の宇宙船ソユーズ  
1号が着陸に失敗

中国が初の水爆実験

チェ・ゲバラが  
ボリビアで処刑される

「アポロ1号」が  
訓練中に火災事故



1987

NHK「地球大紀行」放映  
NTTが携帯電話サービスを開始  
世界人口が50億人を突破  
環境と開発に関する世界委員会が最終報告書を発表  
通称「ブルントラント委員会」と呼ばれるこの委員会の報告書「Our Common Future=地球の未来を守るために」、「持続可能な開発」という概念が中心テーマに据えられた。

1988

ソ連でゴルバチョフ書記長がペレストロイカ開始  
ジェームズ・ハンセンが「地球温暖化」進行に警告  
気候変動に関する政府間パネル(IPCC)設立  
スティーブン・ホーキング博士「The Brief History Of Time」出版

1989

大型タンカー「バルディーズ号」座礁  
アラスカの海に大量の原油が流出、生態系に大きな被害を与えた。これを機に企業が環境を守る基準「バルディーズ原則」が作られ、「企業の社会的責任(CSR)」の基礎となった。

1990

ネルソン・マンデラ釈放  
有人潜水調査船「しんかい6500」完成  
「ハッブル宇宙望遠鏡」打ち上げ  
イラクがクウェートに侵攻

1991

湾岸戦争  
衛星放送によるデジタルラジオ「St.GIGA」放送開始  
雲仙普賢岳で火砕流発生  
フィリピンのピナトッポ山が大噴火

「バイオスフィア2」スタート  
米、アリゾナ州で行われた人工生態系実験。宇宙移住の可能性を検証するために、閉鎖された生態系で人が長期間生存できるかどうかを試す実験だった。結果は失敗。生態系の模倣は難しい。

Google

特定非営利活動法人(NPO法人)法施行

77歳の宇宙飛行士  
ジョン・グレンが宇宙へ  
google社創業

サッカーワールドカップに日本初出場  
インドとパキスタンが核実験  
エルニーニョによる異常気象

1998

地球温暖化防止京都会議(COP3)で「京都議定書」を採択  
ダイアナ妃事故死  
香港返還  
ナホトカ号重油流出事故

1997

サミュエル・ハンティントン「文明の衝突」  
ペルー日本大使公邸人質事件発生  
世界初のクローン羊「ドリー」誕生  
インターネット1996  
ワールドエキスポ2000開催

1996

高速増殖炉「もんじゅ」でナトリウム流出事故  
「新世紀エヴァンゲリオン」放映  
太陽系外の恒星に初めて惑星が発見される(ペガスス座51番星)

1995

英仏海峡トンネル開通  
日本人初の女性宇宙飛行士向井千秋さんが宇宙へ  
ルワンダでフツ族による大量虐殺

1994

欧州連合(EU)発足  
アル・ゴア「情報スーパーハイウェイ構想」発表  
インターネットブラウザ「モザイク」発表  
日本初のプロサッカーリーグJリーグ開幕

1993

毛利衛宇宙飛行士がスペースシャトル「エンデバー」で宇宙へ

1992

リオ地球サミット  
環境保全と経済発展を両立する「持続可能な発展」について活発に議論され、気候変動枠組条約、生物多様性条約の署名が始まった。180カ国の代表や国際機関、NGOなど2万人が参加した。



1999

対人地雷禁止条約(オタワ条約)発効

NATO軍が Kosovo を空爆

東海村核燃料施設で臨界事故  
核燃料加工施設内でウラン溶液が臨界状態に達し、核分裂連鎖反応が発生。至近距離で中性子線を浴びた作業員2人が死亡。翌年公に認められただけでも600人以上の被曝者を出した。

世界人口60億人を突破

国連グローバル・コンパクト創設  
企業が持続可能で責任ある経営を約束するための枠組み。人権、労働基準、環境、腐敗防止などを定めた10原則を遵守することを最高経営責任者が署名して約束することが求められる。

国連ミレニアム・サミット開催  
国連ミレニアム宣言が採択され、極度の貧困と飢餓の撲滅、初等教育の完全普及、女性の地位向上など2015年までに達成すべき8つの目標を掲げたミレニアム開発目標が設定された。

2000

2001

ブッシュ政権がスタート

9.11アメリカ同時多発テロ発生

米軍がアフガニスタン空爆

エネルギー会社エンロンが破綻

2002

欧州でユーロ紙幣と硬貨の流通が始まる

日本のスーパーコンピュータ「地球シミュレータ」運用開始

東ティモールが独立

ヨハネスブルクで地球サミット開催

パリ島爆弾テロ

モスクワで劇場占拠事件

2003

スペースシャトル「コロンビア」大気圏突入後に空中分解

米英がイラクに侵攻しイラク戦争が始まる

新型肺炎SARSが集団発生

ヒトゲノム解読完了

ヒトのDNAに書き込まれている情報を全て解読しようと1991年に始まった「ヒトゲノム計画」が予定よりも早く完了。その後、医療やバイオテクノロジー分野の発展が加速している。

小惑星探査機「はやぶさ」打ち上げ

ヨーロッパで熱波

中国が初の有人宇宙飛行に成功

2004

Facebook創業

facebook

リオで「地球サミット」開催予定

2012

世界人口が70億人を突破する見込み

福島第一原子力発電所事故

東北地方太平洋沖地震

チュニジア革命

2011

生物多様性条約  
第10回締約国会議(COP10)開催  
名古屋議定書が採択

小惑星探査船「はやぶさ」帰還

メキシコ湾原油流出事故

アイスランド南部のエイヤフィヤトラヨークトル火山が噴火

ハイチ大地震

2010

日本に民主党政権が誕生

新型インフルエンザが世界的流行

米ソの人工衛星が衝突

2009

バラク・オバマがアメリカ大統領選に当選  
Android搭載スマートフォンが米国で発売



リーマン・ブラザーズが経営破綻  
米国の大手投資銀行で証券会社であった同社が負債総額約64兆円で倒産。その後の世界的な金融危機の引き金となり、マネーゲームと化したモラルを失った金融資本主義の実態を露呈させた。

中国四川大地震

サイクロン「ナルギス」がミャンマーを直撃

イランが初の宇宙ロケットを打ち上げ

2008

アップルコンピュータがiPhoneを発売

夏期の北極海氷面積が史上最低に

サブプライムローン問題が表面化

2007

地球観測衛星「だいち」打ち上げ

twitterがサービス開始

冥王星が惑星から除外される

映画「不都合な真実」公開

北朝鮮による核実験

フセイン元イラク大統領死刑執行

2006

Youtube創業  
京都議定書発効

愛知万博「愛・地球博」開催

地球深部探査船「ちきゅう」完成

ハリケーン「カトリーナ」がニューオーリンズに上陸

2005

新潟中越地震

日本国内で鳥インフルエンザが発生

スマトラ島沖地震が発生

YouTube

「スペースシップワン」が初めての宇宙飛行

民間による初の有人宇宙船「スペースシップワン」が高度100km以上の宇宙飛行に成功。低軌道の宇宙空間の商業利用は民間の力に期待されており、その道を拓いた快挙だった。



——現在、日本では多くの地域で「共同体の崩壊」が叫ばれています。「無縁社会」「孤族」といったワードに象徴されるように、かつてあった共同体による社会包摂性が低減し、都市部でも地方でも、コミュニティ維持にかかわる問題が共通のイシューになっています。このような時代状況を西田さんはどう見ておられますか。

**西田** 地域共同体の崩壊とは、本来地域と呼ばれているものの特徴の中に幾つもあったもの、例えば農業や自営業の方のつながりなどが、どれも同時多発的に機能しなくなっていくような状況を指しています。特に1950年代以降、人口流動性が高まり、都市への人口集中が進む中で、地方では昔ながらの共同体を維持することが難しくなりました。しかし、都市へ人口を集め過ぎると、将来高齢化がやってきた際に、あらゆるものを維持することが困難になるということは、比較的早い段階で行政担当者にも認識され、報告書など様々な形で指摘されてきました。日本の中でも、例えば70年代から80年代の三全総、四全総と呼ばれているような「全国総合開発計画」の中では既に、各地域を今までのようなトップダウン的なやり方で維持していくことは難しい、それぞれの地域に「創造的な主体」、つまり自分たちで試行錯誤して新しいものを作り、地域を維持していくような主体を生み出さなければいけない、ということが書かれてあるんですね。しかし、実際に日本において政治がそういったボランティアな活動を支援するような取り組みを積極的に行うようになったのは1990年代の後半以後になってから、特に阪神・淡路大震災以後の「NPO法」が成立して以降のことです。つまり、それまで20年間くらい放置していた、いわば「作為の不作为」のような状況が続いてきたわけです。

では、地域共同体が機能しなくなってきた現在において、どうやってそれぞれの地域をもう一度機能させていくのかという時に、幾つかの方向性を考えることができます。ひとつは、ある種の規範的な考えで「昔から地域には人のつ

ながりがあって、そこでうまく回っていたんだからこれを取り戻そう」というある種の復古的・保守的な動きです。例えば商店街にもっとお金を落として、中心市街地を再生しようとか、家族が崩壊しているから血縁や地縁みたいな人のつながりを取り戻そう、というような路線。この手の議論というのは、年長世代の共感を生みやすいし、しかも彼らにとってある意味では有利なようにもできている。

他方で、もうひとつの路線というのが、先ほど挙げた「創造的な主体」、つまり時代の変化に対応した新しいものを作っていくとか、若い人を呼び込んでいこうという路線。こちらは逆に、年長者にとっては不安感をまねきがちです。彼らにとって、若い人というのは何を考えているのかよくわからない。そういう若者を取り込むのは不安だし、しかも前例がないので、うまくいくかどうか分からない。だから、すごく抵抗があるわけですね。僕も行政の人たちとよく仕事をしていますが、行政の場合は前例主義、先例主義と呼ばれているような、どこかでうまくいった方法を持ち込んでくることが多い。「あそこうまくいったので」というエビデンスが欲しいんですね。例えば地域SNSが流行ったら、じゃあうちもやりましょう、みたいなことで横並びに出てくる。最近だとB級グルメですね。富士宮の焼きそばがうまくいったら、どこもかしこもB級グルメだ、みたいなことになってしまう。

——しかし、時代が違えば、あるいは場所が違えば、前提となる状況も全く変わってくるわけですから、同じ方法は通用しないし、昔と同じものを再生しようとしても難しいですね。

**西田** その通りです。当たり前ですが、今、歴史的や伝統的と思われているものも、過去のある時代に誰かが作ってきたわけです。駅前商店街だって、その多くは戦後に人工的に作られたものです。だから、現在の時代状況に合ったものを創造していけるような環境を作っていくかといかない。そういった活動例のひとつとし

て、湘南地域で活動しているエコサーファーという団体がやっているビーチマナーという地域通貨のことを例にあげてみましょう。これは海に落ちているビーチグラスと呼ばれるガラス片を加盟店に持って行くと、ちょっとしたサービスを受けられるというものです。エコサーファーは海をきれいにしたいと思っている人たちの団体なので、「ビーチグラスを拾うついでにゴミも拾ってくださいね」みたいなことをアナウンスしていて、そのメッセージを受け取った人たちは海岸でビーチグラスと一緒にゴミを拾います。ビーチグラスを拾った人たちは、地元の商店で色々なサービスが受けられます。商店の人たちにとっては、ビーチグラスを持ってきた人とコミュニケーションするきっかけが生まれて、そういう会話がお店のリピーターにつながったりする。またビーチグラスを拾っていない地元住民にとっても、地元の海岸がきれいになれば嬉しい。つまり、非貨幣的な価値も含めて、ステークホルダーみんなにメリットがあるモデルになっている。僕は一般的な地域通貨は日本で失敗したと思っていますが、ビーチマナーを評価するのは、もともとサーフィンカルチャーが根づいている、湘南地域の特性を生かしているということです。つまり、今まであった地域通貨というモデルを単に真似したものじゃなくて、地元のリソースを観察することで生み出した、ある種のソーシャルキャピタルの活用を考えている。まさに起業家精神ですよ。

## 「寛容性」が豊かな社会を作る。

——そういった起業家精神を持って共同体の再創造にコミットしていくような人たちを増やしていくにはどうすればよいのでしょうか。

**西田** 時代の流れを読みつつ、実験的な試行錯誤を行おうとすると、すべてが上手くいくことはあり得ず、当然ながら失敗もありますよね。その時に、失敗に対して寛容になる必要がある。僕はベンチャー企業の研究もやっているんです

けれども、人は「再チャレンジすることができない」と思うと冒険できないんです。例えば、個人の不動産を担保にしないとお金を借りられないなら、創造的・実験的な事業にトライするのは難しいでしょう。リチャード・フロリダという都市経済学者が「創造的な都市のキーワードとして「3T」ということを挙げていますが、そのTとは「Technology (技術)」、「Talent (才能)」、そしてもうひとつが「Tolerance (寛容性)」です。この「寛容性」が今の日本の風土に決定的に欠けていて、これをどうにか作らないと、「創造的な主体」は出てこないだろうと思います。

「創造的な主体」といえば、近年ようやくインパクトの高い社会貢献活動を行えるような社会起業家の人たちがメディアで取り上げられるようになってきたので、それはよいことだと思いますが、もちろんソーシャルベンチャーやNPOだけがやればOKということではなくて、そういった高い社会インパクト的な影響を生み出す団体から、影響力の小さい、隣近所の助け合いみたいなものまで両方揃っているような、社会貢献に関わる主体のテールが長い社会であることが大事なんだと思います。そのためには、さまざまな分野で新しい主体の参入障壁を小さくするための規制緩和も必要になるでしょう。大きい主体から小さい主体までが、多様なレベルの活動を通して共同体を支えている、それが「豊かな社会」ということだと思います。

西田亮介

1983年生まれ。東洋大学経済学部非常勤講師。独立行政法人中小企業基盤整備機構リサーチャー。慶應義塾大学政策・メディア研究科後期博士課程。project review主催。専門は起業家研究、地域社会論、情報社会論。『中央公論』『週刊エコノミスト』『思想地図』等で積極的な発言も行うほか、行政、IT企業等と実践も手がける。

## 「寛容性」のない社会に「創造的な主体」は生まれない。

## EARTHLING 06

## 西田亮介

Ryosuke Nishida

### 政策学者

地域活性化や社会包摂性の回復など、コミュニティに関わる問題・課題が世界を覆っている。非営利組織論、地域活性化論の研究に実践的に取り組む西田亮介に聞く、豊かな社会の共同体のあり方。

取材・文●井出幸亮 写真●吉澤健太



## EARTHLING 07

## 香坂 玲

Ryo Kohsaka

## 環境経済学者

1960年には約30億であった全世界の人口が、2050年までに90億を超えられている。急速な人口増加とともに噴出した、環境に対する危機意識。有限な地球のリソース分配をめぐる議論が始まっている。

取材・文●井出幸亮 写真●吉澤健太

——この50年を人類史的な観点で見た場合の非常に大きな変化として、爆発的な人口増加があると思います。現在、世界で起きている環境にかかわる問題の中に、この急速な人口増加が遠因としてあり、またその影響はさらに大きなものとなっていくと考えられています。このような過去の経緯や未来への予測を、私たちはどのように捉えていくべきなのでしょう。

香坂 仰る通り、この50年で人口が大きく増加したことは確かです。ただ、それに加えてもうひとつ考えなければならないのは「生活様式の変化」ですね。2007年には都市部で生活する人口が初めて世界人口の半分以上になりました。一千万人を超える人口を持つ、いわゆる「メガシティ」の多くがアジアに集中して生まれたことも2000年代に入ってから傾向です。また、この50年間の環境問題の中身について言えば、酸性雨の被害や原子力エネルギーの合意形成といった問題から、森林破壊、温暖化、生物多様性などテーマが多様になってきたことと併せて、活動家がリードしてデモなどを行うマス・ムーブメント的な環境保護運動に加えて、科学的な知見を背景にした政策提言

流れだと言えるでしょう。

——確かに、情報環境のグローバル化や市場経済の拡大に伴う形で、日本ももちろんですが、世界各国の環境に対する意識も大きく変化してきたという実感がありますね。

香坂 ええ。そういった世界のグローバル化の中で広がってきた環境問題に対する捉え方の変化ということ言うならば、やはり「予防原則」がひとつのエポックになったんじゃないかと思っています。

例えば、かつては何か環境破壊による被害が出て、もし誰かが病気になったとしたら、その破壊が原因で病気になったということを証明してください、それが証明できれば「問題がある」として認めましょう、というシステムで良かった。しかし、実際に全てが証明されるまで現状を放置して待っていると、取り返しがつかなくなることもある。です。本来人間が関わる活動には全て不確実性を伴うものだという前提で、もしまだ完全な因果関係が発見されていない、全ての条件が揃っていない段階でも、妥当な範囲で規制などの問題を考えていく。原子力エネルギーや遺伝子組換え作物などがその典型

## 環境保全は常に政治、経済、人権などの問題と表裏一体の関係であり続ける。

型の活動が活発になるなど、多様な形にシフトしてきたという経緯があります。

こういった流れをとらえるとき、環境問題が人権や平和、経済格差の問題とリンクしているということを忘れてはいけません。

1960年代の冷戦下における米ソの緊張関係の中では、世界共通の問題について話し合うために両陣営がイデオロギーを超えて交渉のテーブルに着くこと自体が難しかったわけですが、70年代以後はデタントという形でその関係が緩和されたことで、72年にはスウェーデン・ストックホルムで「国連人間環境会議」が行われました。つまり、こういった世界的な活動の背後には、環境変化という物理的な問題だけでなく、常に政治情勢や経済構造の問題が大きく関わっているということです。また逆に言えば、環境保全運動が形を変えながら、さまざまな社会変革に繋がってきたとも言えると思います。89年のベルリンの壁の崩壊の一因には、ドナウ川の環境保全運動を通じた東西の情報連携が役買ったとも言われています。そういった活動を通じた交流が、東欧の民主化や市場経済への移行に関わっていた。ともかくも、環境保全が常に政治や経済、人権などの問題と表裏一体の関係であり続けた、というのがこの50年の

ですが、便利な半面でどういう副作用があるのか完全には分からないものを、「予防」的な視点から考えていくという認識が広まった、というのは大きな変化だだと思います。

### 「たかだか50年」の議論。

——グローバル化によって世界的なレベルで環境問題に対する問題意識の共有が進んだ一方で、各国間での新たな利権の奪い合いや摩擦も生んでいるという側面もあるのではないですか。

香坂 そうですね、古くから議論されてきたエネルギー資源の問題だけでなく、今では遺伝資源や病原体、海洋資源、先住民の知識まで、あらゆる面で権利意識が高まり、各国間で言い争いが起きています。もちろんそこには、発展途上国が経済格差を縮める上で有利に働くよう、自国の資源を戦略的に使っていきたいという意図があるわけですが、その一方で多くの途上国で模造品などを含めて先進国の知的財産権が侵害されている状況が放置されているという面もあるわけで、たいへん交渉が複雑化しています。もちろん力の争いであることは変わらないわけですが、たかだか50年くらいの議論しか行われていないわけですからね。



今後もあらゆる議論と試行錯誤が必要になることは間違いありません。ただ、そういった状況の中で、日本が97年のCOP3、2010年のCOP10で、京都議定書、名古屋議定書をまとめて、各国間のルールづくりの面で主要な役割を果たすことができたことは大きな成果であると思います。環境エネルギーの分野での日本の技術力の貢献に対する海外からの期待も高いですし、2012年の地球サミット(リオ+20)のテーマのひとつである「グリーンエコノミー」という観点でも、世界の注目が集まるところだと思っています。

——世界各国の取り組みが少しずつ進む一方で、個人として環境について考えるとき、問題があまりにも大きすぎたり、あるいは多様な情報が溢れすぎていたりして、行動をすることが難しいという側面もある気がしています。

香坂 日本では1980年代くらいまでに、企業が環境破壊につながる行動を行わないよう、さまざまな規制をしてきて、それは一定の成果を挙げてきました。グリーンテクノロジーなどを通じて、経済性と環境保全が両立し、エコロジカル・モダナイゼーションと呼ばれるものが実現した部分もあります。しかし、一方で市民の消費の面から考えると、「みなさんの消費行動やライフスタイルを変えてください」というメッセージには国民の間で大きな抵抗があって、やはり完全には広がりがなかった部分がある。もちろん、その状況もここ何年かで少しずつ変わってきており、静かではあるけれど市民の間

でライフスタイルについても議論や実践が始まっていますが、統計的な数字で見た場合には、まだまだ改善の余地は大きいと言えます。

これまで企業はずっと「悪者」として色々と言われてきたわけですが、実際にはそれなりに行動を起こし、規制も含めて色々なことが達成されてきた面がありますから、これからはもう少し市民の側が意識を変えていく必要があるでしょうね。確かに、問題が大きすぎて実感が湧きにくい、あるいは情報に対する判断が難しいということもありますが、「私たちは非力な市民ですから」というようなムードは是正されるべきと感じます。エネルギー消費における家庭部門の占める割合は、決して小さくない。こういった問題は個人の価値観に関わる部分ですので、たいへん難しい面がありますが、家庭部門で環境の問題をどう考えることができるか、それが次の50年の課題になるだろうと思います。

香坂 玲

1975年生まれ。名古屋市立大学大学院経済学研究科准教授。国連大学高等研究所客員研究員。東京大学農学部卒業。英国UEAで修士号、独フライブルク大学環境森林学部で博士号取得。2006～08年、国連環境計画生物多様性条約事務局で勤務を経て現職。10年名古屋で行われたCOP10支援実行委員会アドバイザーを務めた。著書に『よくわかる生物多様性』。日本テレビ系列『世界一受けたい授業』4月23日放送分に出演予定。

——世界中のほとんどの人は、まだ宇宙に行ったことがありません。でも、何が宇宙なのかと考えると、地球も宇宙ですし、いま、ここも宇宙の一部ですよ。だから宇宙にはもう行っているよね、としたときに、それでもなお「宇宙に行った」という感覚はどういうところから生まれるんですか？

**山崎** おっしゃる通り、ここも宇宙の一部なんですよ。自分の体も星と同じ成分でできていると小学生のときに知って感動したんですけど、つまり全部、宇宙なんです。だから宇宙に行くという言い方はあまり正しくなくて、「宇宙の中で地球の重力圏を脱出する」という感じが近いですね。

——重力圏を脱出すると何が変わるのですか？

**山崎** そこはもう、全然“違う”んです。重力圏を脱出するまで、宇宙船はどんどん速度を上げて加速していくのですが、エンジンを切った瞬間、ふっと無重力になる。その落差がものすごく大きいんです。私が座っていたのはスペースシャトルのミッドデッキで、窓はちょっと遠くにあったので地球がよく見えたわけではないのですが、その落差で、「宇宙だ!」というのをまず感じました。その後、窓の前に行って地球を見たとき、ああ、ほんとうにきれいだなあと感じました。

——それは予想していた通りでしたか？

**山崎** もちろんきれいなんだろうな、とは思って行くんですけど、実際に見ると圧倒されましたね。視覚だけではなく、五感全部で圧倒されました。

## 地球という生きものと対等にある。

　　今年の2月、宇宙ステーションの端に地球観測用のキューポラという窓が新しく取り付けられました。私たちのミッションは昨年4月でしたので、その直前のことです。キューポラは上半身が全部入るようなドーム型をしていて、180度プラネタリウムみたいに景色が見えるようになっているんです。位置的には地球と逆さに立っている感じなのですが、キューポラに入ると、地球が真上に見えるんですね。飛行機で地上を飛ぶと眼下に景色が広がって、高いところにいるな、という感じになりますよね。でも宇宙だと上下の感覚がないため、どの姿勢をとっても違和感がないんですけど、「地球が真上に見える」というのは結構ショッキングな構図なんです。そういう見え方を体験すると、「宇宙にいる」という感覚は、地上より高いところ

にいるのではなく、地球という生きものと宇宙船とが向き合っている、対峙している、互いが対等であるような感じになるんですね。その感覚は自分でもすごく面白いなと思いました。

——宇宙空間でけんかしたり、ネガティブな感情のぶつかり合いはあるんですか。

**山崎** あるときはありますよね。でもひとつのチームでミッションを達成しようという共通の目的意識が高いですし、結構忙しいので、けんかしている場合じゃない(笑)。長期滞在をしていると微妙なすれ違いがおきたり、グループ的なダイナミクスがあるということは聞きます。なので、どんなに忙しくても、毎日夜ご飯と一緒に食べましょうと。食事はちゃんと食卓で顔を合わせてとろう、というようにみんな気を使っていますね。

——普通のご家庭と一緒にですね(笑)。

**山崎** そうなんです。今回は2週間のミッションで忙しく、毎日は無理だったのですが、2週間で3回は全員で食事をとったんです。最初にロシア人飛行士がロシア料理を振る舞ってくれたので、2回目は野口さんと私とで日本食を振る舞おうということで、手巻き寿司を作ったんですね。南極の昭和基地で使っている保存食を宇宙にも持って行って、玉子焼きや生姜焼きを具にして、ご飯で巻いて食べました。そうやってみんなで一緒に食卓を囲むというのが、宇宙でも一番楽しいですね。

## 沢山の人が宇宙に行く時代。

——空を見上げると、地上からも宇宙ステーションが見えます。実際に行ってから見ると行く前とは思うことに何か違いはありますか。

**山崎** あそこに人がいる。人があそこまで行けるんだというのは、何か不思議な気がしますね。空を見ていると、宇宙ステーションが横切っていくのも星のように見えます。でもその星は人がつくったもので、その中で人が生活している。人の力ですごいなと思いますね。

——多くの人が宇宙ステーションを「理想のうち」とイメージするかもしれませんが、すごい音もするし、空気も変えられないし、たぶん、そんなに居心地のいいところではないんじゃないかと思うんです。山崎さんは学生時代に宇宙ホテルの設計等の研究をされていたということ、実際の住み心地とか、居住性の点で感じられたことはありますか？

**山崎** まずスペースシャトルで宇宙ステーションまで行くんですけど、スペースシャトルは

先端にあるコックピットの部分がものすごく狭いんですね。その下のミッドデッキが居住空間で、7人が3日間、宇宙ステーションに到着するまで生活します。まあ狭いとはいっても、上下左右使えるので、そんなには気にならないんですが……。

　　宇宙ステーションはスペースシャトルに比べれば、全然広くて快適です。宇宙ステーションの真ん中の部分が人が居住できる場所なのですが、ジャンボジェット機にして大体2機分の容積があるんですね。ただ、閉じられた空間なので、空気がこもっているというか、匂いがこもっていてホコリっぽいという印象はありました。とにかく、人工的な空間なんです。ほんの少し緑もありますが、それも人工的な緑であって、一歩宇宙船の外に出れば死んでしまう環境の中で、この宇宙船の中だけが生かされている空間だなという感じはします。

——人が宇宙に行くというのは、地球と同じ環境を一緒に持っていくということ。そのうえで、

# 宇宙ステーションでの生活を存続させる技術というのは、これからの地球のための技術につながっていくと思います。

人が宇宙で暮らす時代が来るのはどのくらい先だと山崎さんは捉えていますか？

**山崎** 私自身意外だったのが、宇宙での生活って結構普通なんです。朝起きて、顔をふいて、歯を磨いて、ご飯食べて、仕事をして、夜寝袋で寝て……と、ルーチン化して日常になるんですね。そういう意味では、宇宙で暮らす時代はすぐ来ると思います。実際に今も6カ月単位で人が宇宙ステーションで生活している。それよりも、どれくらい沢山の人が宇宙に行く時代になるか、というほうが大きいのかなと思います。まずは、弾道飛行から始まりますよね。観光として宇宙まで行って戻ってくる、それはこの数年で始まるでしょう。そこから始めて、400キロくらいの低軌道で周回し、人が宇宙で生活するようになるまでには……あと50年くらいかなと思います。

——行かなければならない理由さえできれば、10年後でもあるような気がするんですが。

**山崎** それはそう思います。もうひとつは、地球を離れることによって、地球のことがわかるんですね。一度自分の場所を離れること、宇宙に行くことは地球を見直す大きな目になりますし、この宇宙ステーションというのは、ミニチュアの地球みたいな感じがするんですね。いろいろな国籍の人もいますし、その中で水もリサイクルして、尿も飲み水に変えて、空気もできるだけ再利用する。まだ食べ物は補給に頼っていますが、宇宙ステーションでの生活を存続させる技術というのは、これからの地球のための技術につながっていくと思うんです。

## 開かれた宇宙に向けた2つのミッション。

——今後、宇宙飛行士のニーズはどう変わっていくと思われますか？

**山崎** これからのミッションを考えたとき、宇宙飛行士の役割としては2つ方向性があるかな

と思います。ひとつはフロンティアを拡大していくミッション。今はスペースシャトルにしても、宇宙ステーションにしても、地上から400キロメートル上空。まだまだ低軌道なんですね。それよりも遠く、月であるか、小惑星であるか、火星になるか、そのすべてになるのか、より遠くのフロンティアを拡大していく方向です。

　　もうひとつが、地球の低軌道の宇宙ステーションなり、あるいはもっと別の宇宙ステーションができるのかもしれませんが、それを活用していくミッション。たくさんの方が観光という形で宇宙へ行ったり、長く滞在するようになっていくという方向です。

　　地球低軌道のほうは、おそらくどんどん民間の力も入れるようになり、より開かれていくでしょうね。遠くのフロンティア拡大はどうしても国主導のプロジェクトになる可能性が高いと思います。火星まで行って帰ってくるとなると、何年もかかるミッションですよ。より強い精

# EARTHLING 08

# 山崎直子

Naoko Yamazaki

## JAXA宇宙飛行士

2010年4月、スペースシャトル「ディスカバリー」で宇宙へ旅立ち、国際宇宙ステーションに2週間滞在した山崎直子。幼い頃からの夢を実現し、地上に戻ってきた彼女がこれから先の人間と宇宙の関係について思うことは何か。新たな50年におけるフロンティアとは何なのか聞いた。

聞き手●神武直彦(慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科准教授) 写真●吉澤健太

神力も求められますし、協調性も求められます。自分自身の健康も管理しないとけないという事で、医学系の宇宙飛行士も必要となるでしょう。火星や月を探索するとなると、地質学に秀でた人が求められるかもしれません。それぞれのミッションによってニーズは変わってくるかなと思います。

—サイエンティスト、エンジニア以外の方が宇宙に行くと、何か変わるんじゃないかなと思うのですが。

**山崎** そう思いますね。今、宇宙飛行士の条件が、日本でもアメリカでも理系の大学を出ていることになっているんですけど、いずれは変わって欲しいですね。特に芸術の感性を持っている人が宇宙に行くと、もっといろいろなことを発信できるだろうし、新しい文化も生まれるのではないのでしょうか。今後50年のうちにそういう変化は起こり得ると思います。

—多くの人が宇宙に行くとすると、更にテクノロジー以外のことも必要になってくると思いませんか？

**山崎** そうですよ。今までは、人もある意味システムの一部として完全に組み込まれていて、機械化されてしまっているところがあったと思うんですけど、さまざまな個性をもった、たくさんの方が宇宙に行くようになると、とてもそういうモデルじゃやりきれないですね。地球上はまだ環境的に広いし、いろいろなマージンがある。だけど宇宙船の中は、今よりも少し大きくなったとしても、人工的な空間であり、かつリソースが非常にクリティカルだし、何かひとつ故障すると即、命に直結するような場所なんです。対応策を何重に組んだとしても、その危険は地球とは比べものにならない。だから、宇宙船の中で人が長期にわたってどう生活し、生まれ、一生を過ごしていくのかは、非常に興味深いことだなと私は思いますね。

—それにしても、過去に前例のないフロンティアなプロジェクトには、一般的に言われているプロジェクトマネジメントではカバーできない何か違うエッセンスが必要となるはずだと思うんですね。そこでの共通の知というのは何なのか。リーダーシップとフォロワーシップなのか、好奇心なのか、山崎さんはいろいろな宇宙飛行士の方を見られていて、宇宙飛行士の共通の技能はどういうところにあると思いますか。

**山崎** 宇宙飛行士はそれぞれ結構個性はあって、性格という意味だと、ばらばらなんです。でも、共通のエッセンスは私もあると思います。それは、おそらく判断力なのかな。優先度をつけて行動できること。何かが起こることは想定

内、宇宙ではどんなことでも起こり得る。だから、ちょっとやそっとのことではたじろがないし、何か起こったときに、ここまで抑えようという、そのセーフティーネットというか、ミニマムのラインを自分でしっかり考えている人が多いと思います。たとえば、何が起ってもとりあえず生きて帰ってくるぞとか、宇宙ステーションは存続させるぞ、とか。そのミニマムラインをしっかりと確保した上で、あるときは冷酷に、他のことは切り捨てたり、優先度をつけたり。そういう判断をできることですかね。

## フロンティアは未知に向かい、臨んでいくこと。

—山崎さん自身のフロンティアというのはどういうところにあるのでしょうか。

**山崎** 単純に考えれば、より遠くに、というのがフロンティアなのかもしれないですけど、物理的な距離とはまたちょっと違うような気もしているんです。私にとっては、少しでも未知なことに向かい、臨んでいくのがフロンティアなのかなと。

そういう意味では、これから私にとってのフロンティアは、一部のいわゆる宇宙族だけではなく、もっとたくさんの方が宇宙に行けるようになること。それによって活動領域が広がり、「人の可能性にはいろいろな切り口がある」ということに繋げていくことなのかなという気がします。何人かの特定の人が行くだけで、それはフロンティアにはならないんです。行ったという冒険で終わってしまいます。

そして、もっともたくさんの方、それぞれ地球全体を考える人たちが宇宙に目を向けるようになること。結局は宇宙でもどの分野でも、最終的には人の気持ちというのが大きくて、技術やシステムをつくっているのも人ですし、自分自身も含めて、人とのつながりを見つめ直しながら新しい可能性を広げていきたい。私自身もまだまだこれからなので。

### 山崎直子

1970年千葉県生まれ。96年東京大学宇宙工学専攻修士課程修了後、NASDA（現JAXA）に勤務し、JEMプロジェクトチームで「きぼう」日本実験棟の開発業務などに従事。2001年JAXAで宇宙飛行士として認定。2006年NASAよりMS（搭乗運用技術者）として認定。2010年スペースシャトル「ディスカバリー号」による国際宇宙ステーション（ISS）組立ミッションにMSとして参加した。現在、東京大学で航空宇宙工学に関する研究に従事。

## EARTHLING TALK

## 水野誠一 × 古川 享

2011年3月1日、慶應義塾大学日吉キャンパス協生館で行われ、  
USTREAMでライブ配信もされたアースリング・トーク。

惑星大に拡大する意識と、個人の思いや暮らしとのバランスはとれていくのか。

Think the Earthプロジェクト理事長の水野誠一と設立当時の理事のひとり、古川享が語る。

写真●下村しのぶ

**古川** 僕は初めて飛行機に乗って海外に出たのが22歳のときなので、比較的遅いんですね。雲の切れ目から海と地上が見えたときに真っ先に思ったのは、「えっ、地球儀と違う」。宇宙から見ると国境に線はないという話がありますが、どこからどこが切れているってことはやっぱりないんだと、カナダとかメキシコあたりを飛んだときに思いましたね。

アメリカに行ったら勉強してこんなことを身につけなきゃとか、この人と闘ってこういうふうになきゃとか、すごく気負いを感じながら海外に出かけたわけだけど、地球を遠くから見たら、こんな大きい地球に対して、自分の存在が米粒ひとつよりさらに小さい、埃ぐらいの大きさでしかない。おもしろいのは、自分がこのまま存在し続けても、消えてしまっても、きっと何の影響もないようなちっぽけな存在なんだというのがわかった瞬間に、自分自身が逆に愛おしくなってくる。

個と地球の間で行ったり来たりすることって、いつもそういう自分の存在を意識させる。地球を意識すること自体が、自分のことをもう一度再発見することにつながっていたような気がしているんですね。

**水野** ガガーリンが飛んで、現実に宇宙飛行ができたんだとわかったとき、僕も古川さんと同じように、人間はいかにはないものかとショックを受けた感じがあるんですよ。

鳥の目、虫の目という言い方があるけど、鳥は空から俯瞰して世の中を見渡せるのに対して、

虫は地上を這って、そこから見ている宇宙観しかないということによく言われますよね。人間がようやく虫の目だけではなく、鳥の目も持てたと。そうすると、いかに人間というのは、今まで地上のことしか考えてなかったか、非常に狭い範囲のことしか考えてなかったか。

今、アラブ、アフリカ方面でいろんな動きが出てきていて、大きなパラダイムが変わっていく傾向があるんだけど、何か当時と同じような感覚をすごく感じているんです。地球に住まわされている人間は、これから何万年も生きていけそうにはないので、だったら地球を大事にしようという言い方よりも、人間同士がもうちょっと仲良く折り合って生きていく知恵をつかんでもいいんじゃないか。そういうヒントを、あのかのときの宇宙飛行から感じた記憶があるんです。

### 文化の縦系と文明の横系 幸せの再定義。

この50年は、さらに50年を遡って100年と言ってもいいんですが、ものすごい勢いで文明が進化した時代だった。かつて産業革命が英国で起きて蒸気機関ができてから、どんどん進化のスピードが速くなって、100年前に飛行機ができて、50年前に宇宙ロケットが飛ぶようになるというぐらいの時間の変化の中で、文明は激しく進化をしてきた。

ところが、これから環境問題を解くときには、急速に進化する文明に対して、文化というもう

ひとつの軸を明確に持たないとだめだと思うんです。よく織物の縦糸、横糸にたとえて言うんですけど、文化は、日本なら日本で脈々と続いてきた縦糸。それに対して文明は横糸。時間軸に沿って次から次に繰り出される横糸のように、新しい技術が生まれてくる、あるいは科学が進化していく。でも縦糸がしっかりしていないと、いくら横糸が出ていっても、織物にならないわけです。それが今、縦糸があまりにも希薄、脆弱になっちゃっていて、横糸から出てくる技能、技術、つまり文明というものを受け止められなくなっているんじゃないか。文明的に突っ走るといふ考え方だと、環境問題は解決できないのではないかというのが、ここ10年ぐらいで再認識されてきた考え方じゃないでしょうか。

**古川** たしかにテクノロジー、コンピューターのパワーで何かを解決する時代ではなくなってきている。根っこにあるものとして、人間が豊かな生活を送るということの定義が、少し間違ったベクトルに動いていたと思うんですね。

たとえば、自然な風を受けとめられないような建物の建て方をしたために、夕方、そよ風を楽しんだり、風鈴が鳴ったりという風情がなくなった世界で人は生活を始めてしまった。もう一度原点に戻るのであれば、都市設計の中で、風の流れをどういう形で受けとめるかとか、人間の知恵として、打ち水をして夕方子供たちや家族が勤めから帰ってくるときに備えるとか、そういうことができればいいですよ。

技術の否定ではなく、技術を生かしながら、人間の知恵とか、昔からの伝統文化、文明として受け継いできたものをどういう形でもう一度再認識するか。どちらも並行して進めることが、もう少し心地よい世界をつくるのかなと。

つまり、利便性があるものと、少し手がかかるけれども、それを手にすることの喜びがわかるものを、どういう比率で受け入れるかということですね。どちらかだけを受け入れて、完全に相手を否定してしまうのは全く意味がないので、どういう比率でそれを自分の中に受け入れ、生活していくかが大事なことのかな。

**水野** それを僕は縦糸、横糸と考えるんですね。文化というものは、必ず脈々と続いている縦糸であって、そこに技術や科学といった、文明的な知恵をどう絡めていくかという発想が必要だと思う。

僕は2年ほど前にブータンに行きましてね。今でこそ、文明導入のスピードが上がってきているようですが、王様が見識のある方で、文明の導入はいいけど、西洋化は好ましくないということを明確におっしゃる方で、自国の文化を大変大切にしているんです。依然公式な場面では「ゴ」という民族衣装を着なければいけないとか、文化の保存に対して、非常に気を配っている国です。そういう人たちを見ると、喜怒哀楽がいろいろあって、暮らしに対してストレートな思いを持って生きている。農作物がうまくできたという、仲間同士で手を取り合って歌って踊るとか、祭りであったり、もてなし

であったり、そういう暮らしが今もあるわけですよ。プータンには、グロス・ナショナル・ハピネス (GNH = 国民総幸福) という考えがあって、お金で豊かさを計る GDP (国民総生産) よりも、幸福が大事じゃないのということを言っている国でもある。我々も幸福や不幸の概念自体を変えるということが、地球環境を考える上で、そして、人間社会がこれからどういう方向に向かっていくかということを考える上でも大事なのではないかな。

## ソーシャルメディアの役割と地球環境の問題への取り組み。

**水野** 話しは変わりますが、アフリカや中東の民主化運動の中で、フェイスブックやツイッターが起爆剤というか、チャッカマン的な役割をしたと言われてますよね。僕はソーシャルメディアの役割と、地球環境の問題への取り組みというのは無関係じゃないような気がするんですけど、その点はどうでしょう。

**古川** アフリカ、中東のことは自分にとってはデジャヴュなんです。これと同じことを僕は知っている。自分も体験した。自分もメディアとかかわりの中で、こういうことを起こしたぞと思えることが実はあるんですよ。高校生のときに。

使えるメディアが進化し、同時に100人じゃなくて、何万人に伝わるということだとか、間違っただけで伝わっていることを「これがほんとうだったんですよ」と伝えるのに、今までだと20年とか、ものすごい時間がかかったんですけど、今は瞬時に軌道修正がかけられて正しい情報に変わっていく。その変化はものすごいものがある。本質のところですよ。メディアを自分たちの味方にしなきゃということと、双方向性のメディアこそ価値があるということ。それから、間違っただけに進んだときに、それを修正するための民力が、インターネットのもので強くなり始めたということを感じました。

**水野** たとえばエジプトでコンピューターなり、メールなり、ネットを使う人たちは、おそらくそんな莫大な数ではない。30%ぐらいだと言われていますけれども、その人たちの中で、さらに一部の人がツイッター、あるいはフェイスブックをやっていたとして、そこから先に広がっていく影響力というのは決して数の力ではな

い。世界に、それこそウェブ (網の目) を通じて広がって、浸透していくという力を持っている。それが、おっしゃるように双方向で、出しっ放しではなく確認のための逆方向の流れができてくるという、そのすばらしさというか、すごさ。

つくづく思いますけれども、ウェブリテラシーというものを持たせた幸せというのをすごく感じるんですよ。

1994年ぐらいかな、西武百貨店の社長を辞めて表に出た途端に、世の中にはどうもウェブというものがあるらしいということに気づいた。ちょうどそのときにネットスケープ社を作ったジム・クラークとの出会いがあって、彼から、「あなたは百貨店で仕事をしていたかもしれないけど、今にあつという間にネット上でものを売る時代になるよ。そのままに夜明け前だよ」と言われた。彼が言っていたのが、実はアマゾンだったんですね。「ネットで本を買う時代になるよ」と言っていたことが現実になって、今や本屋がつぶれてしまう時代になっている。

これからネットの進化は、環境問題に対してもいい動きをすと思うんですよ。その当時から言っていたのは、今に店舗はなくなる可能性がある。でも、どんなに技術や科学が発達しても物質伝送まではいかない。ということは、最後に残る流通業は、物流業かもしれない。しかも環境に徹底的に配慮した合理的な物流を本気で考えていく企業が生き残るかもね、ということを書いていた記憶があるんですけど、まさにそういう時代になりつつある気がします。

## 一人ひとりにとって大事なことを多くの人と共有する場所。

**水野** Think the Earth プロジェクトを最初につくったときに、僕らのポジショニングは、ひとつの 이슈をとことんやっていく NPO ではなくて、企業と NPO/NGO などを繋いでいく、「つなぎ手」としての役割を大事にしていきたいと考えました。NPO の活動も活発になってきて、企業も社会的責任に対して取り組まなければいけないという問題意識を持ち始めている今こそ、問をつないでいくコーディネーター的な役割が求められているんじゃないかなと思います。

アメリカでは、リタイアピーブルのための組織、AARP (アープ) というのがありますね。3,000万人以上の会員がいる組織で、一大圧力団体にもなっちゃっているんですけど、とにかく非常にパワフルな活動ができています。日本は、そういう大きな団体というのはなかなか生まれなくて、小さな団体がそれぞれお山の大将的に活動している。先ほどのソーシャルメディアの役割に近いかもしれないんですけど、一つひとつの活動を繋いで、もっと大きな動きにしていく役割を Think the Earth プロジェクトが持っていかなきゃ、という感じがしますね。

**古川** 『龍馬伝』を見ている、『江』というドラマにしても、というか、フェイスブックの映画『ソーシャル・ネットワーク』でもそうですよ、あの話が2時間の映画になっちゃうんだしたら、同じような話が100本ぐらい書けるぞ、みたいに思っている。「だれも書けなかったビル・ゲイツ」とか、「だれも知らない西和彦さんの姿」とか(笑)。この二人だけじゃなくて、黎明期にこんなことをやったという人が100人ぐらい、すばらしい人がいる。その一人ひとりというのは、きっと小説にしたら、龍馬と同じぐらいのヒーローになれるんじゃないか。その偉業をちゃんと記録に残すと同時に、ヒーローとして演台の上に乗せて、その人がもっとスムーズに活躍できるようにしたい。

一人ひとりにとって大事なことが見つかり始めた人がたくさんいる。それを多くの人と共有する場所を提供していけたらと思うんですね。小さなグループで、それなりの成果を上げながら、まだ社会から認知されてない人がすごくたくさんいるわけだから、その存在価値を社会の中で共有できるような場を何とか Think the Earth プロジェクトで提供できたらと思っていてるんです。個人が生きていた価値というのは、幾らお金もうけをしたかじゃなくて、どういう痕跡を残して、その痕跡が人のためにプラスになったり、その人の豊かな思い出がちゃんと残ったりしたかだと思えるので、そんなことに貢献できる場として機能できたらと思います。

それは跳び箱の前に置いてあるジャンプ台になって、「ここ1回思い切り蹴ったら、もう一段高い跳び箱が飛べますよ」ということなのかもしれないし、上がった成果をたくさんの人と共有し、みんなからの感謝も幅広く共有できる、そんな環境になればと。

僕は最近、若い人たちに、「おっさん、今はこういうことも格好いいんだよ」と教えてもらうことが逆に多くて。それぞれの NPO の活動なり、個人で取り組んでいる人に「何やってるんですか」と聞くと、話がおもしろすぎて、農業の話でも、海外に行ってこんな活動しましたという話でも、「えーっ、そんなことやってきたの? それって怖くなかったの? 大丈夫だった? その資金はどうやって集めてきたの? お金ないのにこんなこともしちゃったわけ」

って、驚かされることが多いですね。自分自身が、若い人たちに啓発されて、「それ、僕知らなかったからもうちょっと教えてよ。せっかくだから、僕がそれをほかのおじさんにも伝えてあげるから」というやり方で、少しずつ世代を超えたインパクトが広がっていったらと思います。

**水野** 我々の世代が、今の若い世代に何をなないでいけるか。それはやっぱり文化だと思うんですよ。今、若い人たちなりに、すごくおもしろい文化をつくっている。だけど、ややもすると、そこに欠落しているミッシングリンクというのは必ずあって、そのリンクを見つけることによって、新しい文化がもっとすばらしく光り輝けるということはあると思います。

時々愕然とするのですが、僕自身も意外と昔のことをちゃんと理解してないということがわかってきて。最近は歴史とか、古典とかを読んで、それをいかにこれからの世代に翻訳していくかが自分の役割かなという感じがしています。

今回、アースリングのことを考えたときに、こういう言葉が出てきたんですね。「地球のことを考えていたら人にたどり着きました」。これはひとつ読み違えると危険な言葉で、人間の命は地球よりも重いと言った政治家がいましたが、そういう意味ではないんです。地球という大きな存在、宇宙につながる大きな存在を考えていくと、いろんな意味で難しく、頭が痛くなってきちゃう。だけど、ちょっと待てよ。地球との位置関係において、自分のことを考えてみると、やっぱり人間、我々が一番おもしろいテーマであって、古川さんが言うように、古川さんの歴史も相当興味深い本になるだろうと思うけど(笑)、そういう断片を、場合によっては DNA みたいな遺伝子かもしれないけれど、いろんなところに散りばめて残しておくかどうか大事なんじゃないでしょうか。

古川 享

1954年東京生まれ。マイクロソフト株式会社代表取締役社長、慶應義塾大学デジタルメディア・コンテンツ統合研究機構特別研究教授を経て、現在、慶應義塾大学大学院 メディアデザイン研究科教授。専門分野はメディアビジネス、マーケティング、プロダクト・デプロイメント、企業連携など。

水野 誠一

1946年東京生まれ。西武百貨店社長、慶應義塾大学総合政策学部特別招聘教授を経て、95年参議院選挙に比例代表で当選。同年(株)インスティテュート・オブ・マーケティング・アーキテクチャ設立、代表取締役就任。現在、海外企業の日本進出や、国内企業への支援に取り組んでいる。



# SPECIAL CONTRIBUTION

by ジアスニュース

<http://theearthnews.jp>

—2012年5月にブラジル、リオデジャネイロで開かれる「国連持続可能な開発会議」、通称「リオ+20」のテーマとして掲げられているのは、「持続可能な発展と貧困撲滅の文脈における、グリーン・エコノミー」です。なぜ「グリーン・エコノミー」という言葉が、議論の共通言語として挙げられているのでしょうか？

**ベリンキー** 人びとにとって非常に大切な、人権、福祉、幸福などの価値は、残念ながら多くのステークホルダーにとって、日々の行動に関する意思決定の推進力にはなりにくいものです。経済の言語に置き換えることなくして、持続可能性や環境などの重要な価値の達成は成しえないのではないかと考えています。多くのステークホルダーにとっては、経済（エコノミー）の方が、意思決定の推進力になりやすいのです。

グリーン・エコノミーといっても、これは単に環境だけを意味するわけではなく、必ず社会的側面と経済的側面をとまなうものです。このすべてを同時に推進するのは大変なことですし、既存の経済を「グリーン」に変えるのは、簡単なことではありません。「茶色」を「緑色」に、「グレー」を「緑色」に、一晩で塗り替えるようなわけにはいかないのです。

## グリーンになるプロセスのさなかにある。

これはむしろ、常に「グリーンニング（greening）」と、現在進行形の「ing」がついた状態であるにとらえた方がいいかもしれません。少しずつ、時間をかけて進行していくため、常に「グリーンになる」というプロセスのさなかにあるのです。これを、すべてのセクターで理解しておくべきでしょう。

グリーン・エコノミーには、いくつか課題があります。ここでは2つほど挙げましょう。まず、発展途上国が、グリーン・エコノミーを脅威に感じている面があるという点です。グリーン・エコノミーに対する投資を行う余裕がないため、経済発展の足をひっぱる足かせになるのではないかととらえているのです。

2点目は、先進国における「グリーン・ウォッシング」とも言われる動きです。すべてにおいて「グリーン」というラベルを貼っておきさえすればいい、という空気が広がり、

人びとがグリーンという言葉に対し、うさんくささや疑念を抱いたり、飽きてきてしまう現象です。ほかにも多くの課題はありますが、これらを少しずつ解決しながら、粘り強く経済の「グリーンング」を進めていく必要があるでしょう。

—マルチステークホルダーにおける、新たな市民セクターの役割とは？

**ベリンキー** 「ISO26000」とは、企業のみならずすべての組織に対して、持続可能な発展を実現するための社会的責任に関する、アイデアやヒントを示したガイダンスです。持続可能な発展を、各組織が具体的にマネジメントしていくために作られました。まさに、「リオ+20」のテーマでもあるグリーン・エコノミーを実現するうえで、ぴったりのツールであると言えます。

「ISO26000」の策定には、90カ国以上から、政府、企業、消費者、労働組合、NGOなどの複数の利害関係者が参加し、いわゆる「マ

ルチステークホルダー」で起草されたことが画期的でした。

これまで、国や企業が主体となっていた国連や国際標準化規格の分野が、マルチステークホルダーによる取り組みに移行しつつあります。その中でも、市民セクターが、より戦略的で中心的な役割を担うようになってきています。

「リオ+20」に向けて、ブラジルで進められている、さまざまな準備活動も、マルチステークホルダーの参加を促しながら行われているところですが、たとえば、市民社会推進委員会（Civil Society Facilitating Committee）では、さまざまな国のマルチステークホルダーの参加を推進する活動を行っており、「リオ+20」開催中に、各国の市民セクターを一同に集める「ピープルズ・サミット（People's Summit）」の開催準備もしています。「持続可能な開発のためのグローバル・ユニオン

## EARTHLING 09

# アロン・ベリンキー

Aron Belinky

GAO代表

「UNCSD（リオ+20）」と「ISO26000」。

環境や経済、社会的責任というテーマにおいて画期的な、2つのできごとに深く関わっているアロン・ベリンキー氏。政府や企業など、さまざまなプレイヤーが参加し、国を超えた枠組みを作る取り組みの中で、市民セクターの役割はどう変わってきているのか。2011年1月に来日したベリンキー氏に聞いた。

取材・文●大井明子（アマプロ）

（Global Union for Sustainability）」では、「リオ+20」の会議目標が今後、どのように実行されるかをモニターするための、継続的なフォーラムの設立準備を進めています。

## 新しい繋がりで生まれる新しい視点と役割。

市民セクターの役割は一層重要になっています。会議で議論される内容の中に、市民セクターの意志が反映されているか、その後のそれぞれのステークホルダーの行動が、決定された方向性に沿って進んでいるかを、チェックする必要があります。議論をアクションにつなげるよう促すのが、市民セクターの役割なのです。

残念ながら国連システムは、環境の問題のようにスピードが要求される分野においても、社会が求める速さよりもゆっくりとしか進まないものです。企業、地域行政、市民セク

## グローバルな市民社会を体現する「リオ+20」。

「リオ+20」のタイトルのゆえんともなっている、1992年に開催されたリオデジャネイロ地球サミットに比べると、世界は大きく変わっています。インターネットもあり、人の移動も自由に行えるようになり、文字通り「国境のない1つの地球」となりつつある。ようやく、グローバルな市民社会が機能し始めているのです。以前は、アイデアとしてしか存在しなかったものが、ようやくさまざまな手段、コミュニケーション、行動、情報共有などによって、実現しつつあるのです。

日本においても、さまざまな取り組みが行われており、「リオ+20」に向けて、市民セクターや産業界、政府などのマルチステークホルダーによる、世界と日本を結ぶためのフォーラム「地球サミット2012 Japan」などの、活発な活動が始まっています。このような取り組みは、世界の市民セクターとの動きと融合し、より協調した取り組みを行う、すばらしいチャンスです。

ブラジルでは今、さまざまなセクターが協力し、「リオ+20」に向けた準備を進めています。現地で開催される、ピープルズ・サミットのようなイベントに参加するのも1つの方法です。それ以外にも、インターネットによる参加の場もありますし、何よりも日本国内のさまざまなイベントなどを通じて、このグローバルな動きに参加することが可能です。ぜひ、日本でもより多くの人が、意見を持ち寄り、行動を起こすためのプロセスに参加してほしいと思います。

アロン・ベリンキー

1963年生まれ。ブラジルのNGOグループ「GAO（Group for Articulation of Brazilian NGOs in ISO26000）」共同創始者・代表。2012年5月に開催される「リオ+20」準備委員会の重要な推進役として注目されている。また、2010年11月に発行した、ISO26000（国際標準化機構策定の社会的責任規格）においても、NGOセクター代表の起草委員として中心的な役割を果たす。

## 意見を持ち寄り、行動を起こすためのプロセスに参加して欲しい

—など、複数のセクターで既に行われている議論の方向性を1つにまとめ、アクションを始めるよう推進することが、今、市民セクターに求められています。最近では、企業や地域、市民セクターが先行して行動を起こし、それを政府や国連が追随するという現象も起きています。

世界には国境があり、政府や国連はその仕組みの中で成り立っています。しかしその一方で、インターネットやそのほかのさまざまな方法により、市民セクターの中では国境を越えた、新しい繋がりができています。市民セクターは、こうした繋がりによって生まれた新しい視点を持って、新しい世界を創ることが期待されているのではないのでしょうか。

グリーン・エコノミーのように、国境を超えたグローバルな取り組みがカギとなる分野では、特に、その役割に大きな期待がかかっているのです。

# Information

Think the Earthプロジェクトは10周年を迎えました。  
学びや行動の新しいきっかけ作りもはじまっています。

Think the Earthプロジェクトは、誰もが宇宙からの視点で地球を感じられるためのプロダクト「アースウォッチ」を世に出そうという自発的な動きから始まりました。1998年にプロトタイプを開発。セイコーインスツル社とともに初代の地球時計wn-1を開発することが決まったのが2000年。そして01年2月19日、プロジェクトが発足しました。

発足当時の基本テーマは「エコロジーとエコノミーの共存」。経済活動と環境保全活動を同軸にする持続可能な社会を目指しながら、自らの運営も寄付だけに頼らず、事業活動と社会貢献活動を両立させることを決意として始まりました。

10年前は日本の企業もメディアも生活者も、環境問題や社会問題への関心はとても薄い時代。私たちの最初のミッションは、この無関心を追い払うために、コミュニケーションやクリエイティブの力で、企業、NPO、クリエイターとともに、心が動くきっかけを作り出すことでした。02年に『百年の愚行』、03年に『1

秒の世界』を出版し、以後、商品、書籍、ウェブサイト、携帯アプリ、デジタルプラネタリウム作品などを世に送り出してきました。

最近「学びの前=プレ・エデュケーション」という領域を提案しています。学びたい気持ちがあれば、人はどんなことをしてでも学び始める。そこで学びの場ではなく、「学びたくなる場」を作りたいと考え、09年から「みずものがたり」をスタート。他にも学びや行動のきっかけを作る活動が広がっています。

おかげさまで、今年は10周年。10年前とは全く違う気分になったこの世界で、これからも新しいThink the Earthをお見せできたらと思っています。10年はあつという間でしたが、たくさんの方に支えられてここまで続けることができました。心からの感謝とともに、これからもよろしくお願ひします。

Think the Earthプロジェクト プロデューサー  
上田社一

【10年間に手がけてきたことの一部を紹介します。】

- 2001年 発足/地球時計wn-1発売/「Think Daily」スタート
- 2002年 写真集『百年の愚行』/ピースボール・キャンペーン
- 2003年 『1秒の世界』
- 2004年 『世界を変えるお金の使い方』/ウォーター・プラネット・キャンペーン
- 2005年 携帯アプリ「live earth」/絵本「えこよみ」
- 2006年 『気候変動+2℃』
- 2007年 『いきものがたり』/「えこよみ07-08」
- 2008年 『みずものがたり』/「地球レポート」/「1秒の世界②」
- 2009年 『たべものがたり』/「えこよみ3」/「みずものがたり」開校
- 2010年 プラネタリウム映像「みずものがたり」完成
- 2011年 「EARTHLING 2011」開催予定



01

## 大型映像作品「いきものがたり」 ついに関東でも上映スタート！

今年は「国際森林年」。生物多様性を考える上でも、私たち人間にとっても、森はかけがえのない場所。私たちが食べているもの、使っているもの、着ているもの、住んでいるところ……全ての背景には、豊かな森をはじめとする“自然からいただく恩恵”がたっぷり含まれています。森は永い年月をかけて、“いきもの命の網目”として紡がれてきた場所なのに、そこが今、どんどん減ってきているのはなぜでしょうか？

大型映像・デジタルプラネタリウム作品の「いきものがたり」は、そんな森や生き物の変化を、親子でも楽しみながら観て・学ぶことができる環境教育コンテンツ。2011年は上映先が大幅に増え、府中市郷土の森博物館をはじめ、関東近県の科学館や博物館でも順次上映が始まります。いつから、どこで観られるかは、WEBサイトをチェック！（風間美穂）

<http://www.ThinktheEarth.net/jp/planetarium/>

02

## 世界遺産を手のひらに Android端末専用壁紙アプリ登場！

いつも見ているスマートフォンの液晶画面が世界を旅する窓になったなら……

Android端末専用のアプリ「壁紙四十八景」は、世界最大級のコンテンツプロバイダ、Getty Imagesのコレクションから、海や森に生きる動植物、世界遺産や大自然の風景など地球上の多様で美しい写真を厳選し、高画質・高解像度の壁紙としてダウンロード（有料）することができます。

このアプリの特徴は、ダウンロードした壁紙を簡単な操作で毎分、毎時間、毎日など、好みの間隔で切り替えて表示できること。今後様々な壁紙セットがリリース予定。壁紙の購入金額の5%はThink the Earthプロジェクトへ寄付されます。ぜひダウンロードしてお試し下さい。※Android端末をお持ちの方は、QRコードからマーケットにアクセスできます。

<http://www.scale.co.jp/k48/index.html>



パールの「空中都市」マチュピチュ（世界遺産）  
中南米・南米編



03

## 親指ひとつでナショナルトラストに 参加できる！

北海道東部に広がる霧多布（きりたつぷ）湿原には、美しいアーチを描く大きな川が流れ、海と陸をつないでいます。ここは5000年もの年月を積み重ね、ゆっくりと形成された大地。今もなお、自然の姿そのままに、様々な動植物が生息し、四季折々の風景が広がります。携帯サイト「live earth」au版では、対象コンテンツを購入すると“100円が畳2枚分の土地保全につながる”ナショナルトラスト・キャンペーンを実施中。2011年1月～5月末までの間、霧多布湿原の着せ替えツール「ケータイアレンジ」や「待ち受けFlash」をダウンロードすると、湿地や生物多様性の保全につながります。スマートフォンにも対応しているため、au以外の方でもアンドロイドマーケットで購入可能です。（風間美穂）

寄付キャンペーンはau限定、live earthは3キャリアで展開中。

<http://uistore.net/rd/le10.php>

右記URLとQRコードはスマートフォンと携帯電話のどちらからもアクセス可能です。



霧多布湿原ナショナルトラスト・キャンペーンで配信中のケータイアレンジ



04

## 一日何回地球のことを考えるだろう？ 「Think Daily」日々更新中

いま地球上で起きていること共有するバイリンガルのウェブメディア「Think Daily」も今年で10年目を迎えます。

「地球ニュース」は、世界各地のリポーターが環境問題、サイエンス、アートなど、様々な視点で集めたニュースを配信しています。注目の活動を世界中からピックアップし、現地取材を行う「地球レポート」はもうすぐ60回。「緊急支援」には自然災害時に現地で支援活動を行うNPO/NGOの寄付先情報をいち早く掲載。2月に発生したニュージーランド地震の支援先情報も掲載しています。「告知板」はみんなでつくる情報ページ。オススメのイベントや活動など、地球を感じられる情報を誰でも掲載できます。

日々更新される地球の話題にぜひ目を通してみてください。あなたが発見した自分だけの「地球情報」を世界中の人と共有してみませんか？（長谷部智美）

<http://www.thinktheearth.net/jp/thinkdaily/>



宮城県・蕪栗沼周辺の水田（地球レポート vol.56 おいしいお米と生物多様性を両立させる「ふゆみずたんぼ」の底力より）

Think the Earth  
[www.ThinktheEarth.net/jp](http://www.ThinktheEarth.net/jp)

Think the Earthプロジェクトは「エコロジーとエコノミーの共存」をテーマに2001年に発足したNPO（非営利団体）です。クリエイティブやコミュニケーションの力で、日常生活のなかで地球や世界との関わりについて考え、行動する、きっかけづくりを行っています。

環境や社会問題への無関心とあきらめの心こそ最大の課題ととらえ、ウェブサイトや書籍などで情報発信を行っているほか、企業やNPO、クリエイターとともに誰もが参加できるプロジェクトを開発・提供しています。

2011年度パートナー企業  
(2011.4.1現在 五十音順)

e-天気.net  
株式会社NTTデータ  
KDDI株式会社  
サラヤ株式会社  
セイコーインスツル株式会社  
ソニー株式会社  
株式会社堀場製作所  
三井不動産株式会社



変える力を、ともに生み出す。

NTT DATAグループ

本誌、および「地球レポート」と「地球ニュース」は株式会社NTTデータのご協力により制作しています。世界各地で注目の人や活動取材する「地球レポート」(年6回)や国内外のリポーターから届く「地球ニュース」はwww.ThinktheEarth.net/jp内の「Think Daily」でも好評掲載中です。

発行●Think the Earthプロジェクト

〒150-0033 東京都渋谷区猿樂町3-1 エムワイ代官山201

TEL 03-3464-5221 FAX 03-5459-2194 E-mail tte-office@ThinktheEarth.net

発行日●2011年4月

企画●上田社一 編集●岡野民 制作●曾我直子

デザイン・イラスト●武田英志 (hoopo)



# EARTHLING 2011

地球人大演説会

[www.ThinktheEarth.net/jp/earthling/](http://www.ThinktheEarth.net/jp/earthling/)

「EARTHLING2011」はこれからの人間の可能性について共に考え、明日からの行動を生み出す、2日間のトークイベントです。エネルギーの専門家から宇宙や深海で活動する技術者、デザイナー、映画監督など、各分野の最先端で活躍する30人のプレゼンターが登壇予定。詳細はHPで！

検索 **アースリング2011**

2011年 **7月30日(土) — 31日(日)**

1日目／開場 9:15 開会 10:00 閉会 19:00 (予定)  
2日目／開場 9:15 開会 10:00 閉会 20:00 (予定)

会場 慶應義塾大学 日吉キャンパス 協生館 藤原洋記念ホール  
アクセス 東急東横線・東急目黒線、横浜市営地下鉄グリーンライン「日吉」駅徒歩1分

※計画停電等の事情により会場が変更になる場合があります。詳細はホームページをご覧ください。

前売り券 1日券 3,000円／2日通し券 5,000円／学生券 3,000円(2日間有効)  
学生の方は当日受付で学生証をご呈示ください。

チケットのお求め チケットぴあ、サークルK、サンクス、セブンイレブンでお求めいただけます。  
Pコードナンバー: 618-716

協賛 株式会社NTTデータ サラヤ株式会社  
ソニー株式会社 株式会社日立製作所  
株式会社堀場製作所 三井不動産株式会社  
(50音順・2011年4月1日現在)

主催 Think the Earthプロジェクト+イベント実行委員会  
共催 慶應義塾大学大学院 システムデザイン・マネジメント研究科／メディアデザイン研究科  
協力 株式会社いずみや 株式会社エコトワザ 河合塾ALUMNI greenz.jp  
ジヤスニュース ソーシャルビジネスデザイン研究所 損保ジャパンちきゅうくらぶ  
地球サミット2012Japan D&Dピクチャーズ 日経ナショナル ジオグラフィック社  
早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター 株式会社ワイズ・ワイズ ほか

## 東北関東大地震 がんばっているNPO/NGOを応援する

# Think the Earth基金

医療、物資、シェルター提供、心のケア……現地のニーズに対して迅速に行動できる支援のプロフェッショナルを応援すること。彼らの活動を知ること。私たちができることはたくさんあります。

### 寄付先を迷っている方へ

2011年3月11日に東北地方太平洋沖で発生した地震、津波、火災等の災害に際し「寄付先はどこにすれば良いのでしょうか?」という質問を多くいただきました。Think the Earthプロジェクトのホームページ内、「緊急支援情報」に掲載している団体は、どこも実績があり、信頼できる団体ばかりですが、団体によって活動分野が異なるために、判断できないという方もいらっしゃると思います。

そこでThink the Earthプロジェクトが基金としていったんお預かりし、「集まった基金の全額」を随時、各団体に振り分けて寄付をし、その収支を透明性をもって報告する仕組みをつくりました。

### 一カ所に集中させるよりも

「緊急支援情報」での掲載、ならびに「Think the Earth基金」を振り分ける団体については、下記の思いで選んでいます。

①災害時はプロでないと現場で正しい判断をすることはできません。そのため、豊富な経験を積んだプロフェッショナルな団体を選びました。彼らを応援することは、私たち誰もができることのひとつだと思います。

②報道等により、大きな団体には巨額な寄付が集まりますが、しっかりした活動を行っている中堅の団体にも活動資金がまわるようにしたい。また、そうしたNPO/NGOの存在と活動を知って欲しい。

できれば各団体のホームページをご覧になり、ツイッターをフォローするなりして情報を収集し、ご自身で判断されるのがベストだと思いますが、私たちがハブとなることで皆さんの負担を減らすことも可能かもしれません。

### 目に見える支援

皆さんの「何かしたい」という気持ちを受けとめ、現地での活動に生きるように届けます。基金の振り分けについては、Think the Earthプロジェクトのホームページやツイッター(@thinktheearth)等で随時実施報告をしていきます。寄付がどのように振り分けられ、どのような活動の支援につながり、役立てられたのか、寄付後もぜひ、見守り続けてください。被災された方たちが一日でも早く笑顔を取り戻してくださるよう、ご理解とご支援をお待ちしています。

### 募集期間

2011年3月16日(水) — 9月30日(金) ※延長の可能性もあります。

### 第一期寄付先団体一覧

3月31日までの第一期は、主に医療支援、シェルター提供、生活・物資支援を行っている下記の団体に寄付をいたしました。特定非営利活動法人ADRA Japan／特定非営利活動法人 AMDA／特定非営利活動法人JEN／公益社団法人 Civic Force／特定非営利活動法人 難民を助ける会／公益社団法人 日本国際民間協力会NICCO／特定非営利活動法人 ピースウィンズ・ジャパン

### お振込先

〈ゆうちょ銀行〉  
記号番号 10190-7986431  
他の金融機関からゆうちょ銀行へのお振込番号は  
口座番号 〇一八店(ゼロイチハチ店) 普通 0798643  
口座名 Think the Earthプロジェクト  
(シンクジアースプロジェクト)  
※記号番号と口座番号は異なりますのでご注意ください。

〈みずほ銀行〉  
広尾支店 普通 1826828  
口座名 Think the Earthプロジェクト事務局  
(シンクジアースプロジェクトジムキョク)  
※お振込時、可能であればお名前の後に「トウホクジン」等を記載してください。  
※必ず口座名を確認の上お振込ください。  
※一度お振り込みいただいた寄付金の返金はいたしません。  
※当基金への募金は税控除の対象になりません。あらかじめご了承ください。

検索 **Think the Earth基金**